

S C P 小嘯集

後方注意鯨

SCPに関する一話完結の短編集を複数投稿していく形にしようと思ったために連載小説という形態を取る形にこの度変更いたしました。

皆様のリクエストなどお待ちしております、どうぞお気軽に！

CC BY-SA 3.0 / 4.0 の下でこの作品は公開されています。この作品の原作群であるSCP作品は作者自身の作品ではない点、営利目的の作品でないことを此処に明記します。

目次

独 り と 一 人	S i l v e r B u l l e t
-----------------------	--

Silver Bullet

一人の男の祈りと、一人の男の行動。たった二人のちっぽけな勇気が、世界を少しだけ平和なものにした話。

銀の弾丸は悪魔や魔物を殺す力がある。転じて、難事への解決策、という意味も持ち合わせている。

*SCP Foundation二次創作モノです。本家サイトに記載されたSCP1983に登場する或るDクラス職員の視点を妄想してみました。偉大なる本家様、並びに今回執筆するにあたって大きな影響を受けた紹介動画様に感謝を。

この作品、『Silverbullet』はDreverettMann作『SCP1983』に基づいたものです。<http://scp.wikidot.com/scp1983>

CC BY-SA 3.0の下でこの作品は公開されています。この作品の原作であるSCP1983は自身の作品ではない点、営利目的の作品でないことを今一度明記させていただきます

『SCP1983・Doorway to Nowhere (先の無い扉)』

Item#: SCP1983

Object Class: Keter (現在Neutralizedと推定)

取扱方 ..

SCP1983を囲むように駐屯地54を建造し、化学プラント工場に偽装して

ください。シプラント工場シは機動部隊C h i 13（シ少年聖歌隊シ）の兵舎として使用します。駐屯地54のすべての入り口に警備を配置します。職員は文書1983・12を熟読し、興味を示した周辺市民に対するカバーストーリーを把握してください。全ての機動隊員はC h i 13要綱に従い信心深い隊員で構成しています。銀または先端が銀で作られた弾を備蓄してください。SCP1983・1の入り口には24時間時計を常に設置します。警備にあたる隊員はSCP1983・2が現れた場合は直ちに交戦してください。予定されている実験以外でSCP1983・1の5m範囲以内に近づいてはいけません。

更新.. 事案1983.23後、駐屯地54からの撤退が許可されました。SCP1983が今後活動する可能性もあるため監視員として最小限の隊員を残します。再びSCP1983.2が活動した時のために駐屯地54の兵器庫に武器を残します。

概要..

SCP1983-1はワイオミング州■■■■郡にある平屋の農家です。≪悪魔的≪カルトによるものと伝えられる連続した儀式的殺人の後、1968年に廃屋となりました。詳細についてはSCP■■■■の捕獲記録を参照してください。

さい。

SCP・1983・1の正面玄関を開くと、内部に異空間があります。SCP・1983・2の事例を除き、戸口から物質や光が出ていることは観測されていません（ただし異空間は熱を発しています）。

SCP・1983・1には、窓や裏口や裏の壁の裂け目といった他の入り口から侵入可能です。しかし、SCP・1983・1内部に居間は存在しないようです。居間に通じるはずのドアは、建物内の他のドアに通じています。SCP・1983・1の内部と外部の寸法は一致しません。SCP・1983・1内部の壁に居間に通じるように穴を開けると代わりにSCP・1983・1正面の外壁に通じますが、戸口の左右3mで止まります。SCP・1983・1の外壁から居間に向かって穴を開ける実験が行われたところより小さな異空間が出現しましたが、それらからSCP・1983・2が出現する事例は観測されていません。SCP・1983・2の出現可能性を増大させる恐れから、これ以上壁を壊すことはO5・03によって禁止されています。SCP・1983・2はおおよそ1.8mの二足歩行の生き物です。彼らは全身が黒く人型のような見た目をしています。彼らは非常に気性が荒く、直ちに人間に襲いか

かります。SCP・1983・2は人間と接触すると肌や組織に傷を付けずに人間の胸腔に上肢を入れ、未知の方法で心臓を引き抜き殺害します。一旦心臓を引き抜くとSCP・1983・2はSCP・1983・1へと戻ります。

SCP・1983・2は祈りを受けた銀の弾丸でのみ殺せます。正式な祈りや信者の祈りではなく、心を込めて祈ることが重要です。SCP・1983・2は殺されると小さな硫黄の跡を残し、蒸発します。

SCP・1983は[REDACTED]郡周辺で発生した不可解な死の事件の後発見されました。財団調査員はSCP・1983・2の後を追うSCP・1983・1を見つけることができませんでした。

付録1..

機動部隊Chi-13の1部隊を怪奇現象の調査のため戸口から内部へと派遣。帰還せず。しかし、彼らが入室するとすぐに正面入口のドアが出現し、彼らを異空間に閉じこめる。SCP・1983・2は出現せず。

付録2..

第一急襲部隊の安否を確かめるため第二急襲部隊がSCP・1983・1に侵入。

帰還せず。扉は閉まらなかった。SCP 1983-2 が現れたためエージェント
モリスが戸口に入り、直後に扉が閉まる。

付録 3 ..

1989年5月23日、D 14134は、25mのコードで外部と接続された
有線式テレビカメラを渡される。彼は可能な限りの内部調査と帰還を命じられる。
一度戸口を過ぎるとカメラの映像は遮断。コードはぴんと張り詰めたかと思うと、
パチンと音を立て切断される。』

僕、僕の名前は…まあ、今となってはそんなものでもいいか。今の僕の「名前」…というよりは識別番号と言った方がいいのだろうか？まあ、そんな感じのモノはD-14134、という。要するにこの番号が今の僕の名前代わりだ。人によつては、まるで囚人番号のようにも思えるだろう。きっとそう思った人のその感覚は正しい物だ。何せ、ほんの少し前まで実際に僕は囚人、それも死刑囚だったのだから。

何で死刑囚になったかと言われれば、答えづらいんだけど。少なくとも、そのことについて嬉々として語ろうとするほど、僕の人間性は壊れていない…はずだ、まだ。兎に角、そうなった顛末はと言えば、浮気を妻が犯していたことに、有るとき気が付いて、口論になった末に頭に血が上って、その挙句に気づけば僕の両手は血塗れになってナイフを握りしめ、妻はその体を朱に染めて身動き一つせず床に横たわっていた…というわけだ。こんなこと、ドラマや映画なんかのフィクションの中

じゃありふれた話のように思っていた。でも、それはあくまでフィクションの中や余所の上手くいっていいない家庭に起こり得るものであって、僕たちには一切関係のない物だと思ひ込んでいた。

…こうなってしまうまでは。実際にその立場に陥った時に初めてそれが現実味を帯びて実感できたのはひどく滑稽な話だと思ひけれど。まあ、ともかくそんな訳で僕は自身で行ったことを通報して、監獄へと収監された。判決は死刑。僕自身、その判決に逆らうつもりは余りなく、唯々諾々として受け入れた。自分で彼女を手にかけておいて今更だとは思ひけれど僕は妻の事を愛していたんだ、本当に。それに、浮氣の一因が僕にある事も、否定しようのない事実ではあるのだから。僕なりに彼女を愛していたつもりではあったけれど、この数年はそんな
に少しでもいい暮らしをさせてあげたいと、その一心で仕事に打ち込み続けた。結果、僕は家庭を顧みることがなくなつて、その鬱屈が彼女に積もり積もつて…そうなる前に彼女は幾度も僕に訴えてきたのだ。それでも、僕はその声に君のためだからの一点張りで、その声を無視し続けた。そんな事の積み重ねが生んだ結果。それが現状だ。

けれど、結局僕に対する死刑が執行されることはなかった。「SCP財団」。今の僕がD・14134として所属している団体。彼らが僕に対してとある取引を持ちかけてきた。曰く、「死刑から救ってやる代わりに私たちのために働いてほしい」と。当然、僕は最初その話を断った。他の死刑囚ならいざ知らず、僕にとっては死刑の消滅という最大の交換条件はさして魅力的なものではなかったのだから。だってそうだろう？ 死刑を取りやめにできるだけの力を持った得体のしれない連中のために働くよりは素直に死刑に処されて妻を手にかけて罪を償おうと思っていた。そうでなければ、どうやって僕に罪を償えと？ そう反論はしてみたものの、どうやら彼らの提案は問いかけの形は一応とっていたものの、僕に選択の余地を与えるつもりはなかったらしい。僕が先に言ったことを理由に拒絶しようとしたら、すぐに半ば強引に独房から引きずり出されたのだから。それならば最初から問いかける必要などないだろうに、と苛立ったのは仕方ない事だと思う。まあ、そのあとに彼らから言い渡された条件、彼女のご両親：要するに元義両親だけど、彼らに多額の金を付与してくれるという提案に心は動かされたのだけれど。断わっておくが何も僕は、彼女の死を金でなかったことにしようと思ったわけじゃない。ただ、それで

も何か僕個人からあの人たちへせめてもの見える形での償いをしたかったんだ。

結局はその条件で提案を呑んで承諾した。それからというもの、めまぐるしいまでの速さで、彼らの研究施設：サイト、と彼らが呼んでいるところへとほかの元死刑囚たち：財団の基準というDクラス職員たちとバスによって搬送された。サイトで最初に与えられた仕事は死刑を免除する、といった破格の条件の割にはGPS監視機能付きのタグとジャンプスーツの着用が義務付けられているとはいえ、単なる書類整理や清掃、建設作業や洗濯といったごくごくありふれた仕事ばかりを回されて、その間に知り合った何人かの他のDクラス職員らとともにいささか拍子抜けの感を覚えるのを禁じ得なかった。：そう、最初のうちは。誰もがそう思っているなもんかとあきれた雰囲気すら新参の職員の間では漂っていた。

そんな毎日の中で最初、僕が違和感を覚えたのはサイト
に配属されて二週間くらいが経った時のことだ。その時まで、何度か作業を同じにしている知人以上の関係（と少なくとも僕は思っていた）D-167
の顔を見なくなったか

ら。Dクラスの誰に聞いても知らず、それならばと顔見知りでたまに世間話を交わす
研究員に問いかけてみたのだけれど、彼は少しだけ眉根

を寄せただけでこう告げた。

「彼はとある実験に参加した時に死んだよ」と。

その時に僕が感じたのは衝撃でもなんでもなく、ああ、やっぱりそうだったのか、という奇妙な納得だけだった。それはそうだろう。こんな破格の条件、裏でもなければおかしいというものだ。それからだろうか、やけに知った顔が見えなくなっていくことに気がき始めたのは。たぶん、僕がはつきりと自分の置かれている現状を自覚してしまったからその事に目が行きやすくなっただけで、実際にはきつともつと前から何人かずつ欠けて行っていたのだろうけれど。

とはいえ、D・87465のやつみたいは何度も危険なサイトの清掃業務やら危険なブツ、確か財団のいうところのSCPオブジェクトとかいうモノの影響実験やらに参加しても青い顔している割には無傷で生きて帰ってきた奴もいたものだ。まあ、彼はその異常ともいえる幸運のせいで財団から目をつけられた挙句、そのSCPオブジェクトとかに認定されて収容されたと伝え聞くけれど。まあ、そういう奴は特例中の特例、ありえないと言い切ってもいいだろう（かといって其のことを羨ましがれるかといえれば万人が首をかしげることになりそうだ）。だから、僕に

いわゆる「特別業務」が言い渡された時、多分僕はここで死ぬんだろうと理解した。「ワイオミング州にあるとある平屋の農家にて、有線式ビデオカメラを使用してその内部の様子を調査し、撮影して帰還しろ。」

特別業務を言い渡されたことを理解して、どういう状況で僕は死ぬんだろう、などとつらつらと考えていた僕にとってはその単純な命令はまさに拍子抜けするようなもので、自分で考えていた想像との余りの落差に一瞬頭をはたかれたような衝撃を覚えてしまったくらいだ。文面に起こされたその指示のなんと簡単そうに見えることか。そんな程度のことで僕の罪は許されて、あの人たちにも多額の金が入り込むのだろうか。その程度の事で僕は許されてしまっているのだろうか。とすら思ってしまった。けれど、現場へと搬送された時に僕はそんな思考がどうしようもなく愚かだったという事を思い知らされることとなった。

一見してプラント工場に見える其処に着いた時、僕は思わず僕を現地まで移送した車を操る運転手に問いかけてしまった。

「ここはプラント工場だろうか？僕が行くのは農家、って聞いてたんだけど。」

「嗚呼。だからここがその農家なのさ。」

何を馬鹿な。そう思った僕はより情報を聞き出そうとしたけれどそれきり運転手は仏頂面で「入ればわかる」の一点張り。まるで、これ以上関わり合いになりたくないという頑なになっているかのような印象だった。しかし、そんな彼の様子も化学プラントの中に武装した男たちによって案内された時（彼らが噂に聞く「機動部隊」だろうか？）何となく、ここやそれにまつわるものを忌避していた運転手の心情を理解できた気がした。

緊迫した雰囲気。財団に加わるまで、ごくごく普通の一般人でそういった空気とは全くの無縁であった僕にもはつきりと肌で感じられるくらいに現場の雰囲気は張りつめていた。それでなくとも僕を案内した男たちの他にも重武装の兵士と思しき男たちがあちらこちらに散見される。それだけの警備を施すに足る何かがここにはある、という事なのだろう。やはり、最初想像していた通り、僕はこれからとんでもない目に合うことになったようだ。とはいえ、拒否権なんて今更ある訳もない。勿論、退くつもりもなかった訳だが。

僕は男たちに半ば連行されるようにして、仮装プラント内に設置されているとある建物に入れられた。中はこの場所にいる兵士達の宿舎やブリーフィングルームも

兼ねている様子で、かなり慌ただしい雰囲気が漂っていた。その中の一角、こじんまりとした部屋に通された僕は事前に言われていた有線式のカメラと、それから自衛用なのだろうか、やけにぎらついた銀の刃を持った長大なナイフと拳銃、その拳銃の予備マガジンを数本渡された。元死刑囚に武器を持たせるなんて豪儀なことだとは思ったけれど、まあたとえ反逆したところでこの数の兵士たちを切り抜けるのは不可能に近いと言ってもいいくらいだし、武器を持たせたのは財団のせめてもの慈悲なんだろうか？これから僕の身に降りかかってくるであろう事に対する。僕にとっては彼らにそんなものが存在すると今更信じられたものではないが。手渡された拳銃を確認しているときに財団の職員から一つだけ言われたことが妙に引っかかった。「心を込めて祈れ。形式だとかどの神に対してだとかは考えなくていい。ただ祈れ。」どういう事だ？そういうえば銃弾の弾頭もどうやらただのものではないらしい。多分…これも銀でできてるのか？あの家の中には狼男でも出るって言い合いのか？…ナンセンスだ、そんなの。そう言い切りたいところだけれど…財団の実情を知っている今となつてはそんな話もあながちウソとは言い切れないように思えた。…実際はもっと…そう、もっとイカれたことに巻き込まれていたわけだが。

すべての装備を身に着けた後、僕は兵士たちに両脇を固められて件の民家の前へと立たされた。兵士たちが後方へ退いてのち、農家の中へと進むよう指示が有ったので僕は指示を出した男に向けて一つうなずいた後に民家の方へ向けてゆっくりと歩み出した。近づけば近づくほど、その民家から何か、異様な雰囲気が発せられているように感じた。その場所の緊張感が僕に伝播してそう感じてしまっただけかもしれないけれど、それでも僕にはそう感じられた。ここはヤバイ、と。

一歩一歩足を進めるごとに鼓動が早くなるように感じられる。五月蠅いくらいに心臓が脈打つ音が聞こえる。そして：そして戸口を潜ったとき、そのすべてが一変した。さっきまで痛いくらいに感じていた背後からの緊張感やざわめき、そのすべてが消えていた。ゆっくりと後ろを振り向けば戸口から見える光景は真っ黒で：無、虚無というべきものだった。外に見えているはずの光景も何も見えなかった。持たされていた有線式カメラのコードは途中からすっぱりとまるで刃物で切られたかのように切断されてなくなっていた。思わず戸口へと足を向けようとしたけれど、直感的に僕はそれを踏みとどまることが出来た。「この外はなんかヤバイ」っという風にね。だから僕はためしに手に持っていた無用の長物と化したカメラを外

の空間に向けて放り投げてみた。すると……まるで溶けるみたいにカメラの存在が消えていったんだ。クソ、信じられるか？カメラが溶けたんだ。きつと僕も最初考えたとおりに足を踏みだしたら……このカメラと同じ末路をたどっていたのだろう。兎に角、この事が意味する所は只一つ。——出られない。思わずへたり込んで床に崩れ落ちそうになった。けれど、僕にはそうやって絶望することすら出来なかった。否、許されなかったと言うべきだろう。

——ひたり、ひたり。

と、廊下の奥の方から何かが歩み寄ってくるような音が聞こえてきた。SCP財団が管理していて、なおかつこないかにもヤバい場所の奥から歩み寄ってくるようなヤツが「君は無言で僕の家玄関に入り込んでなにしてるんだい？そういうのは感心しないな、ちゃんと断って入ってくればきちんとてなすのに！」なんてフレンドリーに声を掛けてくれるはずもないだろう？

だから、僕はその何か僕を見つける前に、慌てて少し先にあったドアの向こうへと飛び込んでから扉を音が鳴らないようになるだけ素早く閉めて、鍵穴から様子を伺った。少しして廊下の奥から歩いてきたアイツは……アイツは一体全体なんなん

だ、クソ。僕にはわからない。二足歩行で、180cm位……歩き方も直立歩行でまるで人間のようで……けれど、類似点はそれだけだ。全身が真っ黒なそいつは……まるで影の化け物のようだった。顔には目も鼻も口も……何もなくてのっぺりしていた。その癖、手と思わしき部位からは長くて鋭い爪が伸びていた。鍵穴からそれを見てしまった僕の恐怖は、それこそ恐慌をきたして喚きだしそうなくらいのものだったさ。多分誰が見たってわかるだろうけど、アイツはやばい。自分の意思に反して悲鳴を上げそうになる口を手で抑え込んで何とかこらえる。そいつはのっそりと僕が入ってきた出口のほうへと歩いて行って、外に出ていく。カメラと同じように消滅してしまうことを期待したが……どうもそう上手くは話が進まないらしい。マジかよ、アイツだけはここから出られるわけか。インチキだろう、そんなの。そうは思ったものの、これはラッキーなんじゃないか。すぐにそう思いなおした。外に出て行ったヤツが何をしでかすのかはわからないけれど、あの数の兵士たちに勝つとはそう思えない。それに財団なら対処法くらい知っているかもしれないし。何せ、ここを収容して大規模な偽装を施してまで管理しているんだ。それに万が一奴が戻ってきたとしても、扉を閉めて鍵をかけてしまえばいい。

だから、奴が扉の向こうの空間に消えて行ったのとはほぼ同時に僕は駈け出して扉に飛びつき、それを閉めた。閉めた瞬間にかすかな違和感を感じて、けれど本当にかすかだったそれを無視しながら。願わくばあの化け物が外の兵士たちにやられてくたばりますように。

これでひとまずは安心だ。あの手じゃ鍵だって使えないだろうし。…とはいえ、ここが最低最悪なデッドエンドで有る事には依然変わりがない。あの影の化け物どもがあの一体だけとは限らないのだし。そして外には出られない。もしかしたら、あの現象は見た目だけで本当は元の場所へ戻れるのかもしれないけれど…試す気にはなれない。つまり、答えは一つ。この奥へ進んでみるしかないだろう。虎穴に入らずんば…とやらだ。さっきまで僕が息をひそめて隠れていた部屋へ戻ってその奥にあった扉を見据える。その扉の先にあるのは？わからない。

わかるわけもないけれど、どのみち進むしかないんだ。意を決してドアノブを回す。古びた外観とは裏腹に、存外滑りよく回ったドアノブを見ながら音もなく開いた扉の向こうへと一步、歩を進める。その向こうの光景は、これまた一等イカれた物だった。何せ、高校のロッカールームと思わしき場所だったのだから。その光景

だけ切り取って見れば、実にありふれたロッカールーム。ただし、その場所が農家の部屋の扉の続く先になれば、だけど。室内は暗いけれど、何とかぼんやりと映るその光景に啞然とする。思わず、支給されていたライトをつけて周囲を確認してみても、何も変わらない。恐らくはバスケットボールクラブか何かのロッカールームだ。そして、その異様な光景に続く異変はすぐに訪れた。それまで暗かったせいでよく見えなかったけど、あちこちに散乱していた真っ黒いゴミみたいなものが光の中で急に大きく、輪郭を持ち始めたんだ。それは……クソ、アイツらだ、アイツらだったんだ。奴ら、光の中で急速にその輪郭をはっきりとしたものへと変え始めてやがった。やっぱり他にも居やがったんだ！慌ててライトを消した僕は手近なロッカーに飛び込んでまた息をひそめた。まるで鼠のように情けなく、それでいて必死に。けれど、数分くらい待ってみてもあの忌々しい足音は聞こえてこなかった。ロッカーの隙間から外を窺えば……どういうことだ？まるで影も形もないかのようにあの影のような化け物の姿は消えていた。訝しみながら周囲を警戒しつつ、僕はある一つの仮説を組み立てることができた。

：奴ら、あの影のような化け物どもはその姿其のままに影の性質を持っている

んじゃないか？つまり、奴らは光のあるところではその輪郭を取り戻して力を増す。けれど、光のない、例えば今の室内のような暗闇の中ではその形を保てず、見えず、触れられない。なら、きつとこのまま暗闇の中を手探りで進むほうがいくらかましなはず。…もしかすると、この仮説は間違いかも。或いは奴らは暗闇の中でも動き回れて僕をあつさりと殺せるのかもしれない。それでも、今はこのわずかな希望の糸に縋るしかない。そう祈ることしか僕にはできなかった。それから…あのゴミもどきにも触れないほうがいいはずだ。何が起こるかわかったもんじゃない。もっとも化け物がそこから姿を現すと知った以上、好んでそれに触りに行く酔狂な奴なんていないだろうが。

足が震える。どうしようもなく。それでも前に進むしかない。このイカれた地獄から出ようとするなら、今更後に引いたところでどうしようもないのだから。クソ、クソッ。僕はただの男なんだぞ。コミックや映画の主人公やヒーローなんかじゃない。畜生め。嗚呼、手まで震えてやがる。視界に入った、ドアノブにかけられた自分の手まで情けなく震えているのを見て自嘲する。それでも、それでも。繰り返し自分に言い聞かせるように内心で呟いて、ドアノブにかけた手をひねって次のドア

へあける。開け続けて、前に進み続ける。ショッピングモール、倉庫、図書館、大
学。どれも何故か見覚えのある、けれど暗くてあの怪物の出てくるごみモドキが散
乱した、変わり果てた部屋をいくつもいくつも通り抜ける。その繰り返しはまるで
行き止まりも出口もないぞと僕に伝えてくるかのようで。

そして最後に：これまでとは違って、はつきりと見覚えのあるドアが僕の前にあ
らわれる。そんな、バカな。やめてくれ：！思わず叫び出しそうになる。まるで
心がきしんで悲鳴を上げているかのようだ。けれど、それでも何とか僕はドアを開
けて部屋の中へと足を踏み入れる。：目の前に写り込んだその光景は見覚えがある
くらいにありすぎる。そう、僕の家の寝室だった場所。そして：僕が彼女をこの手
にかけた殺人の現場。ご丁寧なことに彼女の血がまだべっとりと床にこびりついた
ままの部屋。これは幻影、幻影のはずだ。分かっている、分かっているはずなの
に頬を自然と冷たい涙が垂れ落ちる。前に進むと決意した僕の心をへし折るには十
二分の破壊力がその光景にはあった。この異常な現象からたった一人で逃げなけれ
ばならないという事実を前にして、折れそうになる心をそれでも奮い起こして、震
えながらも進むだけの氣力を必死に保ち続けていた僕の心は、脚は。動き続ける

という理性の叫びに反して、玄関で初めてあの化け物を見た時のように、再び力もなくして情けなくへたり込んでしまう。この先に向かうのは、きっと無理だ。僕にはこの寢室を超えていくことなんてできやしない。

力の抜けた足を引きずるようにしてゆっくりと寢室から抜け出して、ロッカールームの壁にもたれかかるようにしながら声を押し殺してすすり泣く。僕にはもう無理だ。先にはもう進めない。そう考えて、自分の体へと視線を落とした時にふと目に入ったものが有る。銃のホルスターとそれに収められた拳銃のグリップ。そうだ、ここから出て楽になれる方法が一つあるじゃないか？ 自分自身の頭をぶち抜いてしまえば、解放される。このどうしようもないどん詰まりの地獄から解放されることが出来る。それも永遠に、確実に。そりゃ、僕は死刑で以て僕の罪を裁いてほしいと思ったし、死ぬのも受け入れてはいたさ。だけど、こんなのってあるか？ こんなひどいやり方なんて。脱出不可能な妙な家に入れられた挙句化け物に追い回されて、過去の悪夢を再び見せられるなんて。

もう限界だ。ひどくのろのろとした動きで僕は拳銃を引き抜いてセーフティを解除してから、自分のこめかみに突き付ける。けれど、トリガーに指をかけて力を込

めていった時にふと、思いだしたことがあった。僕は何かを見逃してるんじゃないか。どこかで、ほんの数瞬、何か違和感を覚えはしなかったか。僕の生来の気質、周囲の人間から常に指摘され続けてきた、気になった事があればどんな状況においてもそれにのめりこんでしまう、悪癖ともいえる其れが鎌首をもたげる。そんなものはなかった、たとえあったとしても忘れてしまつて引き金を引いたほうがはるかに楽で、第一手間がなくていい。そう思いながらも、一度鎌首をもたげた違和感の心の中でどんどんその質量を増していく。

あれは……。あれは……。そう、あの化け物の一体を家の外へ追い出した時、もっとうなら玄関の扉を閉めた時だ。上手くは言えないがまるで世界が塗り替えられたかのようなそんな、違和感を感じた。もしかして。僕はあの寝室のドアを振り返る。それから、ここまで通り抜けてきたドアを見る。これまで、僕は扉を開け続けてきた。ずっと、ずっと。けれど、どこまで行っても様々な場所の一部が切り取られたかのように出現し続けるだけで何の進展もなかった。そうだ。なんて簡単なことだったんだろう。扉を開けるのがただひたすらに同じような結果の連鎖を生み出し続けるならば、扉を閉めてしまえばいい。理解してみれば、なんて単純な原理だ。

ついさっきまでの最低な、萎えかけた気分すら忘れて泣き笑いのような表情を浮かべて、思わず笑ってしまいそうになる。こんなことにも思い至らないなんて。頭へとあてがっていた銃をずるり、とおろして再びホルスターへとおさめる。壁を支えにしながら、ふらふらと立ち上がって元来た道に戻っていく。最後に一度だけ寝室へと振り向いてさよなら、とだけ呟いて。僕はその呪わしくも、忘れてはいけない、そして忘れられない部屋の扉を閉めて、背を向けた。まだ、終われない。

ふらつく足を踏み出して、最初に化け物が歩いてきた廊下まで戻ろうとする。化け物が最初に姿を現した方へと自分から向かっていく、というのはあまり気分のいい話ではないけれど。ただでさえ、光さえあればすぐに襲いかかってくるような連中だ。暗闇を慎重に息をひそめて、ネズミのように歩く。普段の僕ならその様子を無様とすら思っただろう。けれど、今は、今だけは無様を気にすることが出来るわけもなく、必死に身を隠しながら、目についたドアを片っ端から閉めていきつつ、来た道に戻り続ける。そして、漸く最初に入ってきた玄関までたどり着く。化け物を相手取ることを考えて震える手で拳銃をホルスターから抜き放つ。今度は自分の頭を撃つためではなく、化け物を撃って前に進むために。長い長い廊下の先に見える

ドア。何の変哲もない、これまでと全く変わらないそのドアをゆっくりとあける。銃を片手にこれまでの事を思い出してこの先にはどのような人外魔境が広がっているのだろうかと感じて、心に浮き上がってくる怯懦を必死で押し殺しながら。

しかし、予想に反してその先に広がっていた光景は凄く、そう凄くありふれたもの。どのような一軒家にも存在するであろうリビングルーム。だが、だからこそ。この空間はこれまで通ってきた部屋とは明らかに異常なモノであった。異空間ではない、恐らくこの家本来の部屋なのだ、ここは。つまり、僕はここにきてようやく本当に前進することが出来た、きっとそういうことなのだろう。開けたこの部屋を警戒しながらも、ゆっくりと中へ進めばまたしてもこれまでと異なる異質なものが転がっていた。：干からびた人の死体。数人分の死体が転がっていたのだ。自殺したか、あの化け物にやられたのか素人の僕に判断がつかないけれど。このままいけば僕もきつと彼らのようになってしまうのだろうことは簡単に予測がつく。再び折れた心を好奇心だけで必死に寄せ集めてここまで来た。

けれど、あの寝室とこの死体のせいで最早それも限界。せめて彼らを僕なりにでも弔ってから自分も彼らの後を追おう。死体の手を組み直してやって、せめて少し

でも安らかに逝けるようにしてやろう。そう思つて一人の死体に近づいた時、その手に銃と、そしてメモが握られているのに気が付いた。不躰とは思ふけれど、その紙が遺書だったりした場合、そこに書かれた願いを、せめて現状で僕にできる事を叶えてあげたい。同じ場所に閉じ込められたという奇妙な仲間意識ゆえか、そう思つて彼の握りしめたメモ用紙をそつと手に取つて目を通していく。

『Item#..わかんねえ

Object Class..Keter。かわいいそうに。

取扱方..

アンタは死ぬよ、残念だけど。

これは脅しじゃねえ。オレはエージェントバークレー。オレはこの呪いの中にいて、アンタに話してる、アンタもここに來たのか？アンタ死ぬよ。オレはすでに死んでるだろうけどな。』

最初の数文までを読んで、漸く悟る。彼等もまた僕と同じ財団の職員なんだろう。いや、正確に言うならば、正式職員できつと僕よりその地位が高いのだろうけど。きつと彼は僕に先行してここに送り込まれた人達の一人。そして、彼の死体に

一つ、奇妙な点があった。恐らく自殺したであろうはずなのに、その銃痕が胸に刻み込まれているという事。何故だ？自殺するにしたって普通はそんなところ狙う訳がない。こめかみか、或いは口内に銃口を突っ込んで延髄か脳味噌を吹っ飛ばすと言ったところだろう。なぜそんな真似をわざわざ？分からないけれど、そんな真似をした理由がこのメモの中に残されているかもしれない。そう思った僕はさらに読み進めていく。彼：エージェント・バークレーが最後に綴ったその記録と、そして祈りを。

『だから出れねえ。さっさと封印しな。方法は唯一つ。呪われた扉を閉めることだ。その扉を通っても戻れねえからな。まあ、もう試してるか。だけどヤツらはその気になれば外に出られる。そのせいでオレらはこのクソツタレな場所を見つけちゃったんだからな。アンタがもう扉を閉めてくれるといいんだがな。オレらはもう閉めた。外に出るのは諦めたんだ。まだやってねえなら、まっすぐ戻って扉を閉じな。それが今、アンタがやる唯一つのことだ。なんにせよ、アンタは死ぬ。死ぬ前になんかイイことしときな。』

：僕の考えはどうやら間違っていなかったようだ。扉を閉めることで初めて前に

進むことが出来る。実践してみたこととはいえ、なんてあべこべな話なんだ。それにイイ事、なんて見当もつかない。こんなところで何をしろと？ せいぜいが最初に考えた通り、せめて彼等：バークレーや他の死人たちのために祈りをささげて出来る限り丁重に弔ってやることくらいだろうか。

『概要…んで、ここから説明だ、もう知ってるかもな。財団はアメリカのど田舎で問題が起きたと知らされる。牛や野生生物が変死したんだと。行方不明者の数は増えるばかり。見つかつてても心臓が無くなった死体で見つかる。切ったり、裂かれた痕もなくな。胸の真ん中がカラなんだと。ヤツらは真っ黒いカスみたいなのが浮かんでるのを見つける。似たようなヤツを見たことがある財団の秀才野郎が、殺し方を発見した。神に祈りを捧げた銀の弾丸をぶち込めばいいってな。文字通りにな。なんでかは知らんが、それでうまく行く。どの神かは関係ねえ、アンタが心を込めたかが重要だ。』

：想像以上だ、それも悪い方向に。なんて化け物どもなんだ。心臓を傷もなく抜き取って生物を殺すなんて。嗚呼、けれどこれで分かった、この中へ来る前にエージェントから伝えられた、「祈れ」というあのアドバイスの意味が。もっと詳細に

説明してくれれば……いや、無理か。こんなこと正確に伝えてしまえば僕は多分向こうでパニックになって、殺されるって事すら忘れて逃げ出しそうだしな。……まあ、今更奴らの殺し方を理解したところでどうしろという話ではあるのだが。

『オレにはもうできねえがな。巢を見ちまったからな。とにかく、財団はアレがすべてどこから来んのかわかってる。村の真ん中にある、なんかの家だ。殺人やらカルトやら儀式やらうわ言喚くやらなんやらあって以来そこには何年も空き家だ。肝心なのは、ここの玄関からヤツらが出続けてるってことだ。部隊がそんなか入っていったが誰も帰ってきやしねえ。でも、バケモンも出てこなくなった。正気な奴ならこう言うだろう。十分だ、目を離すな、少しでも動くものがあれば殺せ。だけど、まあ、これがこの財団だ。』

そういえば……ウチの財団にも便宜上名称が有るんだっけ。聞いた話では確か設立された最初に提唱されたモットーの頭文字……Secure（確保）Contain（収容）Protect（保護）だったか。ご立派な思想だよな、ホント。何がSCP財団だ。Destroy Destroy DestroyにしてDDD財団とでも名乗ればいい。なんだってこんなイカれた代物を保護しちまうん

だ？しかも、話に聞いた限りじゃこいつよりヤバいのもごろしてみたいだし。しかしまあ、何か？この空間はカルト教団かなんかの悍ましい儀式のおかげでどうかしちまったって言うのか？しかも奴らは巢まで持つてゐるって話だし。まるでB級映画の筋書きみたいだ。：僕が現在進行形でその地獄に放り込まれてなかったらそう嘲笑ってられたんだろうけど。でも、これは徹頭徹尾現実だ。逃げるすべはない。

『アンタはどの糞部隊のタフ野郎だ。スクエーレ・ノースか、オレみたいに聖歌隊か。アンタは扉をぶっ壊して中に入る、それだけ。そしたら終わりだ。』

：残念ながら、貴方の予想は大いに外れてしまったようだ、エージェント・バークレー。エージェントですらない最下級の、使い捨て可能な消耗品のDクラス、それもタフガイですらない僕が貴方の遺書を手に入れてこうして読んでいるのだから。最も、貴方が挙げた彼等であつてもたどつた末路は同じだったとは容易に推測がつく。貴方自身、本当のところはわかつていたであらうとは思ふけどね。

『居間は最悪だ。そこはオブライエンが捕まった場所だ。捕まるとアイツは突然ぶっ倒れ、ヤツらの一人が心臓を取ったんだよ・・・爪で、だったかな？ヤツら

はここでは不明瞭だ。もう気づいてるだろうが。ヤツらは影みたいなもんだ。光から離れる。バカみたいな話だけど、そうしろ。光の中で、影は強くなる。ヤツらは輪郭を持つ。暗闇ではヤツらは不明瞭になる。ヤツらはアンタにほとんど触れられないし、見ることもできない。オレはヤツらは影を見てるんだと思う。わからねえが。正直なところ、ここじゃ藁にも縋りてえ。』

…居間は危険か。結局、此処のロジックに気付いて進んだところで意味なんてなかったわけか。とんだ喜劇だな。まあ、もう今更戻る気力もわいてこない。財団が次の犠牲者を送り込まないことをせめて祈りつつ此処で幕引きにしたいものだ。…そしてやはり僕の印象通り、奴らは影のようなもの、か。光は厳禁、薄暗闇の中をおっかなびっくり歩きまわらなきゃいけない訳か。もし、奴らから逃げてどうにかしようとするんだったら。意味なんてないだろうが。

『アンタはもう扉で戻ろうとしただろうな、だけどできねえ。それはもつと最悪な場所につながってる。そこにバケモンはいない、だけど…外に出て家から離れたジョーンズは、信じられねえかもしれないが、溶けた。アイツの身体から何かがはじけだして、そして…。アイツが戻って来なかったってことよく覚えておきな。

そして、オレらは扉を閉めた。それで、オレらは家の中を動き始めた。気づくまでオレらは光を点け続けた。3人がそれで殺られたが、おかげで周囲を良く観察することはできた。ここがどこかって？でかい。ただの農家じゃねえ。ここは：ここはまるでいろいろな場所をかき集めて継ぎ合わせたようなとこだ。アパートみてえなところもあればショッピングモールみてえなところもある、信じちゃもらえないかもしれないが、オレの高校のロッカーまでありやがった。タイルも何もかも同じやつだった。ほかにはなんでできてたと思う：ごみだ。それは黒く、影みたいで、ほとんどが光りに照らされていた。明かりが消えれば、アンタも手を入れられる。止めといたほうがいいがな。それでトレスは消えた。なんかがアイツを捕まえると、引っ張られていった。穴は小さかったが、それでもアイツは引っ張られていった。だから、光は避ける、暗闇で足元を見続けろ。』

ああ、涙が出るほどありがたい忠告だ、それが手遅れにすぎることを覗けば。まあ、自分の体が溶けた訳じゃないんだ、よしとしよう。それにどうやら僕の感じた印象は万人が同じく：とはいかないかもしれないけど、少なくとも一人は同じ想像をするモノだったらしい。：高校のロッカー？その言葉を聞いて脳裏に閃くもの

があった。ここで一つの推測が出来上がる。ここは……入ってきた人間の記憶を「覗く」か何かして、その時に合わせて内部が無限に形成されていくんじゃないだろうか？それならあの寝室があった事にも合点がいく。それに進む部屋すべてに見覚えがあったことも。そしてあの忌々しい怪物たちの出てきたゴミ。触れなくて正解だったらしい。……大体なんだって危ないってわかりきったものにわざわざ好き好んで手を伸ばそうとするんだ？それも調査のうちだっていうのか？全く、なんて話だ。

『もちろん、脱出はできねえ。オレらもそれは理解した。アンタが見つける扉はこのキチガイ病院の別の部屋に着くか、外に出るかだ。ようやくオレらは死ぬんだとわかった。そう、ここじゃ餓死するか、ヤツらに捕まるかしかねえ。感動的な選択だよなあ、ええ？』

……分かりきっていた事ではあるけれど、やはりその二択か。いや、僕がやろうとしている自殺という選択肢もここに加えられるのだから三つかな？確かに感動的だ、本当に。涙がちよちよぎれそうになってくるくらい。

『ここでアンタがやることは一つだ。オレはやりきれなかったが、アンタはできる

かもな。それをしてもしもアンタが生き残れるとは思わねえ……でも大事なことだ。誰かがやってくんなかったら、ヤツらはいつか外に出てくる。間違いない。ここは色々な場所を奪い取ってできたものだ。それで、オレはこう考えてる。ここにはまだ他に扉が存在するに違いないと。オレらは見つけた扉をすべて閉じきった。だけど、また扉が開いたら？そのとき財団がヤツらを見つけられなかったら？クソが、あいつらは扉を閉めることすら知らねえんだ。また誰かをこの中に入ればヤツらを止められるってことに気づいてくれるのを願ってる。もっとも、入ったヤツがみんな扉を閉めるくらいには頭が回るって仮定の話だな。』

僕にやれること？そんなものが残っているとは全くもって思えない。僕はどこにでもいる有り触れた、ごく普通の男だ。僕の代わりにタイタス・クロウか何かでも呼んで来いと叫びたくなる。奴らと戦えと？ナイフと拳銃だけのちっぴけな装備で。ナンセンスなジョークだ。けれどまあ、扉を閉めることに気づいた辺りは僕は試験の第一段階はクリアしたわけだ。受けたくもクリアしたくもない試験ではあるけれど。

『そうか、オレはこれを止める方法を見つけたと思う。それは巢だ。オレは一度だ

け、2、3分見ることができた。デニングの心臓を抜き取ったクソ野郎をオレらは追った。オレはこの部屋がすべての中央にあるんだと思う。それは真っ黒で、どんな灯りも吸い込むことができるんだと思う。ランプ、懐中電灯、ロウソクなんかもな。他のヤツらも運んでいったのをオレらは見た。とにかく、中央にたくさんの心臓でできた塊がある。心臓はどれもこれも山に投げ込まれて、引き裂かれてた。ヤツらはデニングの心臓を放り込むと、それは鼓動し、脈打ち、のたうちまわった。それから引き裂かれて、心臓を一つ引きぬいた。それは震えて、成長し、動き始めた。塊がバラバラになっても心臓は鼓動し続けた。オレの胸も疼くのを感じた。』

：奴らを止める方法だと？ 嗚呼、神よ。僕のツキはまだなくなっていない訳か。そう思って読み進んで行って、その次に書かれた内容に思わず慄然とする。奴らを止める方法、そしてその次に書かれた文章は巢の詳細。感づかないほうがおかしいだろう、ここまでくれば。余程鈍くない限り。そして、僕はあいにくと鈍すぎるわけではなかった。

『そこは影の集まり。バケモンってことじゃねえ、本当の人間の影の集まりだ。人間から伸びてる影は一つもない。影は心臓から伸びていた。そして、新しい影が現

れると同時にバケモンが産まれた。影の奴は心臓から離れようとしていたが、離れられなかった。オレは逃げた。オレは耐えられなかった、分かるか？オレはこのクソツタレな状況に対処する訓練なんて受けてねえ。オレの後ろでなにか聞こえた。それがオレを呼び止める仲間の声なのか、バケモンがオレらを見つけた音なのかわからないが、オレは皆と別れた。オレは隠れるのにちょうどいいクローゼットを見つけ、それ以来ずっと隠れ続けている。オレはこれをペンライトで書いている。ヤツらが近づく音が聞こえたら、オフにしてる。今の所、このやり方で上手くいっている。』

取り出した心臓は奴らの素材になる、それは分かる。だが心臓から伸びる影……？離れようとするってことはその影には意志のようなものも存在しているという事なのだろう。だが、理解できない。最も、この農家の中に入った時点で理解できない事しかない訳だが。今それを考えてもはや意味はない事だし。

：彼が逃げることを選択してしまったことを果たしてだれが責められようか。それが出来るとするならば恐らくは彼に置いていかれた同僚のエージェントたちだけだろうけれど、その彼らも恐らく今頃は化け物どもに仲間入りしている事だろう。

この狂った場所の中に入ってきて、それで心折れないものが居るだろうか？ましてやその化け物どもの根城として居る場所であつての仲間が心臓だけに、影だけにされた姿を見て臆さないものが居るだろうか？居ないだろう、居る筈もない。だが、そんな逃げた彼でも僕よりは遙かにマシだと言えるだろう。僕としては尊敬の念すら抱きそうになる。安易な死の道に逃げようとする僕と違って彼は生きて自分の負った責務を果たそうと分かり得る限りの情報を書き残したのだから。僕も、その言葉にかなうことならば応えたい。もしこの心が折れていなかった、と仮定してだが。そう、悲觀的になっていた。少なくとも、次の文章を読むまでは。

『オレはここから動けない。オレの銃には弾が少し残ってるが、意味なんてねえ。もう折れない。巢を見ちまった。だけど、アンタ、もしアンタこれを見つけたら、俺に代わって、やり遂げてくれ。多分、アンタはオレよりも強い。決心がついたら、巢に行つてぶち壊してくれ。すべての心臓をぶっ壊すんだ。そうすりゃ、ヤツらを殺せるかもしれねえ。これがオレが考えられる唯一の方法だ。』

無茶だ、むちゃくちゃだ。僕なんか。僕なんかそんな真似ができるわけがない。そう思つてしまう。そう思わざるを得ない。情けない。情けなくて涙すら込み

上げてきそうになる。よれてしわの残された紙面を指でなながら自虐する。そして、とうとう涙を一粒、紙へ落してしまったときに、氣づく。

：紙にいくつものシミが刻まれていたことに。まるで、僕の前にこの紙へと誰かが涙を幾筋も、幾筋も落していたかのように。自分の情けなさを嘆く様に。恐怖に負けて尚、それに抗おうと泣きながら抵抗したかのように。そのことに思いを馳せれば僕もつられて涙が出る。先程までの冷たく感じる涙ではなく、熱を持って垂れ落ちる涙が。悔しいさ、僕だって。生き抜きたい、という考えが真っ先に来るわけじゃない。そりゃあ僕だって生き抜きたい。このままここで死ぬなんて誰が好き好んでやるって言うんだ。少なくとも、僕は違う。でもそれ以上に。それ以上に、このままここで何もできずに死ぬのが悔しくて仕方がなくなってくる。それは。彼の、パークレーの祈りを、最後の願いを、抵抗を無駄にになってしまうことだから。自分でも理解できないけれど何故か自然とそう思えて、俗に言う男泣きというヤツをしてしまった。

『アンタは死ぬだろう、でも何やってもここじゃ死ぬんだ。だからなんの問題もないだろ？ オレ、オレはこれから居間へ向かう。アンタがこれを見つけてくれるこ

とを祈って。もちろん、オレの心臓はヤツらに使わせない。』

方法はもう示されたんだ。後は、僕が。いや、「オレ」が祈りを受け取って銀の弾丸になるだけだ。重ねられた「オレ」。「僕」なんていうのは：やめだ。彼の願いと、オレの思いが重なる。

怖くて足が震える。ここで死ぬことになるだろうと考えて。怖くて手もおぼつかない。自分という存在は無意味に消えてしまうのだろうかと考えて。怖くて涙がにじむ。こんなまともじゃない、心底からイカレきった場所で死を迎えてしまうだろうこれからを考えて。

けれど、今はそれより怖い物が出来た。出来てしまった。祈りを、受け取ってしまったから。それを無碍にすることなんて、できなかったから。彼の文字通り命をかけた抵抗と、オレが何もできずに死んでいくのがたまらなく怖い。紙中びしりと刻まれた彼の涙の痕を見て。臆病だと、自分を罵り。それでもなお、自分を奴らの材料になんかささまいと心臓を自身の手で打ち抜いた彼の振り絞った勇気を見て。奮い立った。奮い立つしかなかった。そうさ、どうせバークレーが言ってるようにどうせこの中に入った時点で死にまってるようなものなんだ。それなら、

みっともなくとも。格好がつかなくても。足掻いてやる。僕はいつを止めれるかもしれない方法を託されたのだから。いつもの僕のように失敗を恐れて踏みとどまる必要なんてないんだから。だって、どうせ生きてここから出られる可能性なんてゼロに等しいのだから。それなら、やってやる。やれるだけ。バークレーの書いたメモの、祈りの最後の部分をゆっくりと噛み締めるように読む。

Good luck. 死にゆく貴方に、死にゆく者より敬礼を。

ああ。やってやるさ、アンタの分まで。だからそっちで見てるがいい、オレがどこまでやれるのか。例え、最後まで行け付けないとしても、足掻いてやる。：死ぬのは、怖くなくなった。不思議と。ラテン語の警句で見送られるなんて洒落てるじゃあないか。紙を彼の手へともどし、手を組み直してやってから立ち上がる。

：正直なところ、この手紙はお守り代わりにしておきたいところだが：止めた方がいい。彼の祈りはオレだけに託されたものではないのだから。きつと、彼のそばにある方が正しいのだ。目の前に在る、これまでより一層異様な雰囲気放つ：ように思える、ドアを涙をぬぐって、見据える。いこう、この先に。生唾を呑みこんで、少しでも乾いてひり付いた喉を癒すようにしながらまた一歩足を踏みだす。こ

れまでとは変わらない、相変わらずの異様な雰囲気。それでも感じる重圧はこれま
でよりはるかに重く体にのしかかってくるように思える。きつと、何も変わってい
ないのだろうけど、やはりこういうものは気の持ちよう、ということなのだろうか。

一步、一步。微かに鳴り響く自分の足音にすら恐怖してしまいそうなほど神経を
張り詰めさせながら必死で歩く。そうやって、たどり着いたのは一つの部屋。彼の
メモに残されていた通り、これまで以上に真っ暗で、光を吸収してしまっている
かのような暗黒におおわれた部屋。その中央にはバークレーの言っていたように、
心臓でできた不気味で奇怪なオブジェがあった。真っ暗で、光源もない、そのはず
なのになぜか心臓の一つ一つから伸びている影たちをやけにはっきりと視認でき
る。束縛から逃れようと必死になってもがいている者。ただぼんやりと立っただけ
になっている者。何かを考え込んでいるかのようにうろうろと動き回っている者。
そして、すべてを諦め、どうしようもないという事実を受け入れたかのようにしゃ
がみこんでいる者。そこにはあの化け物どもが生み出してきたすべての犠牲者たち
が居るのだろう。身勝手ではあるけど、せめて彼らをきちんと解き放ってやろうと
バークレーの推察通りに手近な心臓へと手を伸ばす。

その時、恐れていた最悪の事態が起こった。あの化け物どもの一匹が戻って来たのだ。もし捕まれば私も同じようなことになり、おそらくこれを止めるのは不可能になる。反射的に手に握りしめていた拳銃をしっかりと構えてバークレーの祈りが無駄にならないようにと祈りながらトリガーを引く。此方へ飛びかかろうと構えていた化け物の胸へとまるで吸い込まれるかのように銀の弾丸は飛び出して……一瞬のうちに化け物をただの硫黄の塊に変えてしまった。

……やった。やってやったぞクソツタレめ、ざまあみろ。ここにいる誰かたちの仇だ。とは言え、このささやかな勝利に酔いしれている暇はない。この銃声を聞けば他の化け物たちも集まってくるかもしれない。なら、その間にやるべきことは一つだ。目の前で脈打つ心臓に恐怖しそうになるのを抑え込みながら、手に取って銀の刃を持つナイフを振りかざして、その心臓へと突きたてようとする。

その時、ふと思いついたことが有って壁を見る。真っ暗な空間に焼きつけられたかのように浮かび上がる、その心臓から伸びた影を見る。恐らく男性の影であろうそれは、まるでやってくれとでも言わんばかりにオレの方を向いて頷いていた。……わかった、任されよう。迷いは消えた。今度は逡巡することなくナイフを心臓へと

突きたてて破壊する。…グチャ。生々しい音と感触と共に心臓の一つが硫黄となっていく。これでまた奴らを一匹この世から消せた、というわけだ。満足感を覚えながらもハツとして先ほどの影が居た方向を振り返る。分かりきっていた事ではあるが、心臓を破壊したのとほぼ同時に、その影は消えようとしていた。

———
ありがとう

そんな言葉を聞いたように思ったのは果たしてオレの幻聴だろうか。きっと幻聴だろう。幻聴であってほしい物だ。化け物の仲間入りを無理やりさせられてこの中へと閉じ込められ、挙句其の救いが死ぬことしかない、など…あまりにもむごい話ではないか。そんなことがあっていい物か。許されていいわけがあるものか。これまで感じた事すらない強い義憤を感じてただひたすらに心臓を切りつける。そのほとんどが例の言葉ではあったけれど、中にはまだ死にたくないという悲嘆や、何故そんな真似をするんだという怒りの声すら聞こえてきて…其の度手を止めそうになる。心がまたへし折れそうになる。

それでも。それでも今更やめるわけには行けないんだ。歯をきつく食いしぱりな

がら半ば機械のように、同じ動作を：繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し、行う。心を殺して、耳を塞いで。オレの精神を責めさいなむ彼らの、犠牲者たちの声から目を背けて耳をふさぎながら。そうやって繰り返して数十分か数時間：数分ってことはないだろうな。

ここに閉じ込められてすっかりくるってしまった体内時計を力なく自嘲してみながら、やっと繰り返したその行為に終わりを見出す。後数個、たった後数個だ。それで、オレの、バークレーの願いは果たされる。祈りは、届いた。そんな時でも、いやそんな時だからこそ気は抜けない。この心臓をここまで破壊したという事は、あの怪物ども、クソツタレの影の化け物どもの総数をそれだけ減らせたという事なんだろうけど、当然それだけで安堵するのは些か早計に過ぎるというものだ。それ来た！パン、という乾いた音とともに銀の弾丸が発射されて再び化け物の体を射抜いて硫黄の塊へと変える。

先ほどからかなりの頻度で奴らがこの部屋へと侵入してくる。まるで、焦るように、ここへと向かってくる。つまり、事態は奴らへとって悪い方に、そしてオレにとっではいい方向へと進んでいるというわけだ。ハハッ、胸のすくような思いだ。

けれど、そんな中で有っても時間が経つごとに状況は悪くなる。破壊してない心臓はまだ多い、あいつらは一発で仕留められるとは言え、このままでは有限の弾を使い切ってしまう。もし、弾が切れて近寄られれば恐らくオレは勝てない。弾が切れたら、おしまいだ。だから、その前に。繰り返し振りかぶってはナイフを心臓へと突きたてた腕が痛む。いったい何個の心臓を破壊してきたのだろう。彼らの悲痛な声を聴いて心も摩耗しきった。それでも、やるしかない。後、一個だ。後一個。最後の心臓に繋がれていた影はオレを氣遣わしげに見やった後にこの真つ暗な部屋の壁に消えて行った。最後の影の言葉はありがとう、だった。…悪くない、かな。何故か達成感すら感じられる。そこまで考えて違和感を覚えた。

「…待てよ」

思わず言葉が口からこぼれ出る。全ての心臓に僕は刃を突き立てきったはずだ。なのに、なぜこの状況は一向に改善されない？ 疲労しきって壊れそうな程に鈍った思考が、割れそうに痛む頭が回転する。ふらふらと足から力が抜けてくず折れる。やっぱり出られないか…或いは、まだ終わっていないのか。その答えはすぐに明らかになった。

…のそり、のそり。

これまでの影と同じような、それでいて明らかに一線を画す存在がこの部屋の中へと入ってきた。明らかに、これまでのモノより大きい。人間を元になっているとは思えない巨軀。天井に頭を擦り付けそうになりながらうっそりと歩み寄ってくる。優に三メートルは有るだろう。全ての心臓を破壊したはずなのに、こいつは動ける。何故だ！何を間違えた！彼の推測は間違っていたというのか!?それでも抵抗しようとする銃口をそいつに向けて引き金を引く。……カチリ。無情な金属音が響く。

「畜生ッ！」

罵声が口から飛び出て、それでも引き金を引き続ける。其の度、冷たい金属音だけが部屋に響く。弾切れ。予備のマガジンももう使い果たした。役立たずになった拳銃を放り捨てて手に持った血まみれのナイフを突きつけて情けないほどに腰が引けた構えで、腕を振り回して牽制する。

一瞬だけ怯んだ様子を見せるもののすぐにそんなものは脅威じゃないとばかりにまた足を踏みだしてくる。そいつの表情は全く読み取れないはずなのに、何故だか

こちらを嘲笑してきているような気がした。自分を苦しめておきながら、抗う術を最早見いだせずに、その膝を今にもおりそうなオレを。ここまで来て、どうしようもないのか？ 本当に打つ手はないのか？ 或いは：バークレーの考え自体が間違っているのか？

そこまで考えて不意に気づく。彼はあのメモに何と書いていた？ 「この部屋にあるすべての心臓を破壊しろ」。そう、言っていたはずだ。そうか。オレは失念していた。まだ、一つ残ってるじゃないか。ピンピンしたまま脈打っているとびつきりに新鮮な、心臓が。ここに。オレの胸の中にあるじゃないか。疼く胸を押さえつけながら心臓が鼓動しているであろう胸の辺りを見る。その間にも化け物は確実に距離を詰めてくる。：ああクソ、やっぱりここから出る事なんて不可能じゃないか。：でも、だからこそ。オレの、僕の腹はもう決まってる。ああそうさ、あの手紙を読んだ時からもう決めてたことだ。どうせ死ぬなら、イイ事をして死のう。抗って死のう。オレはただのDクラス職員、使い捨ての末端に過ぎない。だから何だ？ それがどうした。

「化け物風情が、僕を、オレたちを舐めんじゃねえ！」

震える声で、ガチガチと恐怖して歯の根を鳴らして。それでも、引き釣った笑いを浮かべながら煽り立てる。オレの意図するところに気づいたのだろう。まるで、これから行いう行為を制止するように腕を伸ばしながらそれまでの余裕をかなぐり捨てて走り寄る。後数秒もあれば、それは間に合っただろう。つい数瞬前まで此方をなぶって殺そうとしていた奴が、僕が自殺しようとするのを必死に食い止めようとするその姿はひどく滑稽で、口の端が釣り上る。

けれど。

「ザマアみやがれ。してやったぜ、イカレ影野郎」

吐き捨てるように、小ばかにするように呟く。走り寄ってくる奴の姿を嘲笑しながら、オレは、僕は。自分の胸に刃を突きたてた。冷たく鋭い刃が僕の肉を切り裂いていく。事ここに至って僕にも少しはツキが回ってきたらしい。水平に刃を寝か

せて突きたてたナイフはあばら骨に刃が当たたる事もなく、またよく研がれていたせいでろう、殆んど抵抗なくオレの肉を切り裂いて、自分でも驚くほどあっけなくその切っ先は心臓までたどり着いて、貫いた。一瞬の後に気が狂いそうなほどの痛みと共に灼熱の熱を持つ液体が喉をせりあがってくる。我慢できずに勢い良く吐き出したそれは、掛け値なく己の血だった。僕のいのちが流れ出ていく。真っ赤な血液として。

それでも、目蓋を睨ってこの地獄のような痛みを早く終わらせたいという甘美な誘惑から目を背けるために必死に目蓋を開けて耐える。本当にこれで正解だったのか確認してやろうと。オレの目の前で、化け物はもがき苦しむように全身を掻きむしりながら段々と硫黄へと変わっていく。

：成功だ。もう、十分だ、僕はやり遂げたんだ。その光景を見届けた僕の目蓋は自然と下がっていき、やがて視界は暗闇の中へと閉ざされた。不思議ともう痛みは感じない。これが死ぬという感覚か。ひどく冷たいのに、どこか心地よさすら覚えてしまう。：嗚呼、僕と、パークレーの祈りは通じたんだ。

もう…休んでも、
いい…ころあい、
だろう…。

…ああ、そうだ…もし、てん、ごくなんてものが…ある、なら…バークレーと、あえた、なら…銀の、弾丸に…ぼくをか、つてに…したてあげたこと…文句、言わないと…。そ　まえに…じこ、しょうか　…か、ら…しな　と、だけど…。

…それか、ら…あ、あ…
あ、やまら、ない、と…。あわせ かお……な けど……。でも、もし、ゆる て
れたなら、また…まえ、みた に、ぼくの、なまえ…
ほしい、な……。

『数時間後、SCP-1983-1の怪奇現象が消失する。中には数人のエージェン
トの干からびた死体があり、当該SCPについてまとめられたとみられる非公式の

レポート、文書1983-15が発見される。当該SCPはD-14134によって無力化されたと推測され、彼の死に財団の勲章が贈られた(財団史上、Dクラスで叙勲された2人のうち1人)。文書1983-15から得られた情報により、この異常な現象は局地的なものに留まらないと考えられたため、類似の事案の調査に新たな人員があてられている。』

『捕捉1..』

当初、オブジェクトの再発を恐れ、最深部までの偵察は断念されていたものの、時間が経過し、少なくとも再発の懸念が限りなく低い物と判断され、第二次偵察隊が派遣される。なお、その際に最深部にて胸にナイフを突き立てた死体を発見、D-14134と確認される。先に発見された文書1983-15の内容と状況を鑑みるに、D-14134の手によってSCP-1983が無力化されたものと改めて判断された。』

——英雄、というモノは頻繁に現出するものではない。けれど、あの時、あの場所においてD・14134とエージェント・バークレーの行った、或いは示した行為は二人が英雄、と称されるに足るだろう。同じ状況に陥ったとして、果たして何人が同じような行動を取れるだろうか。この事案が歴史の表舞台に浮上するこ
とは決してないだろう。この財団が存続する限り。それでも、私は彼らの事を思い

返し、考えるたびに改めて感嘆せざるを得ない。人が本来持っているであろうちっぽけで、けれど時として大きな力になる勇気の事を。だからせめて。私の胸にはとどめ続けておこう。二人の会うことは無かった、けれど確かに想いを交錯させた英雄達を。

——
博士

独りと一人

大変、大変お待たせしました。

以前より書いては消し書いては消しを続け、仕事が始まりモチベが焼失したりゲームをしまくったりといろいろやっているうちに早数年がたってしまうというふがない結果になってしまい大変申し訳ありません。

それでもお届けいただいた様々な感想に支えられてようやく投稿が叶いました。相変わらずまとまりの、とりとめもない乱文ではありますがお楽しみいただければ幸いです。

以降も機会があれば作品を皆様の目にお目に掛けることができればと思っています。勿論このようなひどい頻度ではなくですが。

どうぞお楽しみください。

この作品はクリエイティブ・コモンズ表示継承3.0/4.0ライセンスに基づき作成されています。この作品は下記に示す素晴らしい二つの原作によって生み出された二次創作作品であり、作者自身は下記作品の原作者ではない旨を此処に明記いたします。

SCP544 JP、孤独な放送室

著者: DocRone

URL: <http://scp.jp/wikidot.com/scp544.jp>

作成年: 2016

SCP Tale JP、進路相談

著者: izhaya

URL: <http://scp.jp/wikidot.com/sinrosouda>

n

作成年: 2018

誰かの記憶にとどめられることもなく、静かに、自分という存在がただただ消えていく、忘れ去られていく。そんな事を人は繰り返して行ってきたし、これからだつて繰り返すのだろう。でも、それが親しい誰かからの記憶からですらであつたとしたら？友人、恋人、家族、なんだっていい、自分と深い関係のある人たちからすら自分の記憶が消えていくとしたら？それはどんな気分なんだろう？…俺はその答えを今思い知っている。答えはひどい孤独感と恐怖、それだけだ。皆俺が誰であつたかを記憶にとどめることはない。忘れられるなんて何でもない、なんて。そんな事を言う野暮はよしてくれ。俺だってここに来る前はそう思っていた、けれど。

「■■■さん、同級生の皆様がお待ちでした。」

…ああ、まただ。また皆が俺を忘れていく。本当に忘れられたかはわからないはずなのに、きつとそうなのだろうと確信してしまっている。だからどうか、嗚呼、どうか。誰でもいい、俺の事を忘れないでくれ。俺は…

オブジェクトクラス.. Euclid

特別收容プロトコル.. SCP-544-JPの敷地内に民間人が侵入するのを防ぐため、カバーストーリー「改装工事予定地」を適用し、4人の警備員を配置してください。SCP-544-JP内部に侵入する場合、侵入時間は必ず3分以内に置き留めてください。3分間を超えて侵入し続ける必要がある場合はDクラス職員に侵入させてください。その際、侵入させるDクラス職員は遠隔から終了出来るように小型爆弾を取り付けてください。内部に侵入したDクラス職員を知覚するため、必要に応じて收容メンバーの編成を一部変更することが許可されています。

説明.. SCP-544-JPは■■■■県に存在する5階建て構造の百貨店で、「デパート」の名で知られていました。19■■■年に廃業し、■■■日後に取り壊しが行われましたが、その翌日に完全に形状を復元していた事が財団に把握され、收容に至りました。

SCP-544-JPの内部に人間が侵入すると、3分毎に「お知らせです。[対象A]さん、「対象B」さんお待ちでした」という内容のアナウンスが放送されます。対象AはSCP-544-JP内部に侵入している人物です。複数人がSCP-544

4・JP 内部に侵入していた場合、アナウンスの度にランダムで対象 A が選定されます。対象 B は選定された対象 A と直接・間接を問わず面識のある人物で、SCP・544・JP 内部に居なくてもランダムに選定されますが、「家族」や「友人」などの言葉を用いて一度に複数人が指定される場合もあります。

このアナウンスが完了すると対象 B は対象 A に関する記憶を失い、どんな手段を用いても対象 A を知覚出来なくなります。上記の文章以外のアナウンスが放送される場合もありますが、それらに異常性はありません。

SCP・544・JP の内装は SCP・544・JP が ■ デパートとして営業していた時期を模倣した作りになっていますが、すべての領域において無人であり、食品はすべてサンプル製品に置き換わっています。SCP・544・JP の 5 階には放送室と推定出来る部屋がありますが、外側から内部の状態を確認出来ず、侵入も出来ません。放送室の扉には「如月工務店」と書かれています。そのような団体の所在は確認出来ていません。加えて、■ デパートと如月工務店が実際に関わっていたという公的証拠は存在しない、もしくは抹消されています。

以下はSCP544-JPの調査記録及びそれに付属する情報の抜粋です。

「それで、俺はこの中に入って一階から順繰りに探索していけばいいのかい、博士？」

「嗚呼、そういうことだ。そのカメラで内部情報は常に撮影される。勿論、脱走は不可能な様に爆薬もつけて。君が逃げ出そうとすれば…ドカン、だ。」

「…け、分かってるさ。オタクらは本当にいい趣味してるぜ。言われなくても今更逃げるも隠れもしねえよ、どうせ出来ねえんだし。…それで、此処に俺が呼ばれたってことはまあそういうことなんだろ？こいつはどんな代物何だ、え？」

「説明をする理由はない…と言いたいが。まあいいだろう、このオブジェクトの異常性はアナウンスで名前を呼ばれるたびにその対象者が読み上げられた者たちの記憶から完全に消えてしまう、それだけだ。」

「…それはまた。大層な建物じゃねえかコイツは。まあいいさ、俺みたいなのはぐれ

者：いやさ、嫌われ者にはお似合いだ。違ukai?」

「其処は私には関係がない、君はやれと言われたことをやる、これまで通りに。だろう?」

「全くもってその通り、ぐうの音も出ない正論だ。」

なんて嫌味な言い方をする野郎なんだ、目の前の白衣をまとった博士と言葉を交わしながら嫌そうな顔を隠そうともせずになんな事を思う。

そんな顔をしたところでどうせ彼らは気に留めないのだ、ならばどうせ気兼ねするだけ無駄、というモノだ。

だからせいぜい嫌味を籠めて顔をしかめて見せる。ガキみてえなささやかな抵抗だが……。まあ、単純にただの無意味な路傍の石程度にしか見られないってのは業腹な訳だ、別に現状がどうにかなると思ってるわけでもねえ。

渡されたc c dカメラと集音マイク、それから護衛用の軽い武器を受け取って改めて建物を見上げる。何とも思わなかった寂れたデパートが今や何故だか威圧感を放っておれに押し掛かってくるかのような錯覚を覚えてしまう。

ぞくぞく、背筋を思わず悪寒が駆け抜けて慄然としてしまう。馬鹿な考えだ。ど

うせ娑婆に出ちまえば俺の方が恐れられるってのに。こんななんかただ古ぼけた誰にも知られてない、ただのオンボロデパートに過ぎないってのに。そう強がってみても：どうにも不安と悪寒を拭えない。け、他人から忘れられるのがなんだってんだ。どうせ皆が俺の事を記憶から消したがつってるってのに。

そうとも。どっちみち今更、今更だろう。どう考えたって、何もかも。手遅れなんだ。全てを振り払うように首を振って、目の前の博士の手からひったくるようにしてカメラを奪い取ってエントランスに入っていく。

まるで、今にも「当店はこれより開店いたします」なんて、アナウンスが響いてきてもおかしくないくらいに、はた目から見てもそこは整えられたデパートだった。ちよっとばかり設備類が古い印象はあるが随分立派なもんだ。：それこそ、娑婆で利用してたとこみたい。だが、だからこそ異常なのだ。

ここは既に人がいなくなつて久しい：職員どもが言う所のSCP。人知を超えた異常さを持つ存在。それなのに、此処は未だに綺麗なまま、それがおかしい。誰がどう考えたって。管理してるわけでもないのに。だろう？けれど、まあ。だからこそなのだろう。即ちここは既に異常の腹の中。正常なんて上等なモノはどこに

もありはしないのだと。

「まずは一階の探索をしてください。気になるものを見つけたら即座に報告してください」

インカムから博士の声が響いてくる。OK、仕事の時間だ。一つ深呼吸をして煙みたいにとっ散らかる思考を落ち着けさせて、周囲をゆっくりと見渡す。

「あー…えっと、エレベーターがあるな。でも動いてはいないみたいだ。俺の知ってる店の支店がいくつもあるな、人はいないが。…ま、当たり前だよ。」

どことなく、懐かしさすら覚える光景。デパートなんてもうずいぶん通っていない。この財団に来る数年前までは塀の中で暮らしてて、その次はこの財団のために働いてたんだから。それでも、そんな懐古をろくにできるような状況じゃあ、無かった。

こみ上げる不安感、押し寄せる焦燥。言い表しようもないくらいにネガティブな感情が渦巻いて。

「本日はご来店まことにありがとうございます。心行くまでお楽しみくださいませ。」

「えーと…これはつまり…?」

「異常性についての説明は受けていますね?」

その、アナウンスには大凡似つかわしくない女の子の声が俺の名前…そしてオレの母親の名前を読み上げる。どうしてこいつは俺の名前を、そしてオレの母親の名前を知っているんだ? その不気味さ、異常さが何とか落ち着きかけていた俺の頭をひどくうすら寒い風となって駆け抜け、また思考を吹き散らす。

そんな中、また響いてきた研究員の奴の声に何とか意識を向ける。そうだ、説明は受けていたじゃないか、こういうものだ。つまり…俺という存在は母親の中から完全に消えた。

或いは、そうなった方がよかったのだろう、というのはこの中に入った時から、いやこの任務に選ばれて異常性の説明を受けた時から考えていた事だ。俺は犯罪者だったから。逮捕されて、収監された時も随分と泣かせちゃった。きつと記憶から永遠にいなくなった方がはるかにマシなんだろう。きつと。それでも、いざ直面してみると…どうしても、動揺は消せなかった。自分という存在が確実に人の中から消え始めたのだから。

「ああ、ああ……まあ、そうか……次は如何すべきだ？」

「支店のキッチンが動くかどうか試してみてはくれませんか？」

次に何をするべきなのか、何をしてはいけないのか。そんな事でもいいから考え続けてないと、気が変になっちまいそうだ。思考が止まりそうになった時からネガティブな考えばかりがまるではいずりこむ隙間を見つけて嬉々として侵入しようとしてきてるみたいに頭をよぎり出す。

だから、研究員に自分が何をすべきかどうか聞いてみた。平版な、事務的な口調。その人間味の薄さが帰ってオレに反骨心と、それによって齎されるわずかばかりの冷静な判断力を与えてくれる。それに、誰かの声があるってのはそれだけでマシに思えてくるもんだ。こんなこと、口に出せたもんじゃあないが。それでも。

指示された視点を探すために周囲をぐるりと回り見る。お目当ての店舗はすぐそこだ。歩み寄ってレストラン・の看板を潜る。娑婆に居た時は俺だって何回か利用した経験のある店だ。勝手知ったる、という訳でもないがレストランなんて内装は異なっても、構造自体はそう変わるもんでもない。指示通りにキッチンへと向かいながら、ついでに周囲を観察してみる。こういうのを向こうさんは望んで

るんだろうしな。

「おお、こいつはまた。食品は全部サンプルだな。水も置いてある。けどそれも粘土かなんかで作られてる。キッチンに向かうぞ。」

試しにおかれていた料理を手にとってみる。違和感。いや、まあ当たり前のことではあるんだが。そう、それは本物の食品ではなく。店先のウィンドウに並んでおくべきモノ。水にしたってそうだ。全て。此処にある何もかもが本物ではない。うわべだけを取り繕った偽物。そんなものに取り囲まれる、という。形容しがたい不快感。そんなふうに試しながら、そっとキッチンの中へ入る。

「いろいろ動かしてみてください」

途端に入る指示の声。うんざりしてしまいそうになりながらも心の中で呟く。アイアイ、了解。そう、従うしかないのだ。まさか逆らったからと言っていきなりドカン、なんて真似はないだろうが。かといってこの段階でしようもない危ない橋を渡るような真似なんてシナイに限るってもんだ。

だからこそ、そこら辺の物にとりあえず手当たり次第手を伸ばして触れて、ガチャガチャと弄ってみる。水道の蛇口をひねり、レンジのスイッチを入れてみる。

或いは空調をいじったり冷蔵庫の設定温度を上げてみたり。コンロに火を入れようとし、オーブンを熱そうとしてみせる。けれど。

「ダメだな。レンジも水道も繋がってない。」

当然の結果、というべきか何というべきか。あちこち弄り倒してはみたものの、その全てから反応は全くない。その結果をインカムに向かって口にしながら、他にいじくれそうなものは何かないのかと顔を上げて辺りを見回す。

しかしまあ、こんな分かり切ったような結果が返ってくるだけのものまで調べにやらんとはね。つくづくわけのわからん組織だ。所属している身で今更そう言うのもおかしい話なのだろうが……まあ、なんにせよ俺たちみたいな末端なんぞ在ってなきがごとし、というところだろうしな。

「お知らせです。■■■■さん、■■■さんがお待ちでした。」

再び鳴り響く、幼い少女の奇妙に焦ったような、不安そうな声で流されるアナウンス。全くもって不愉快な認識を抱く。何から何まで人を不愉快にしたくてこんなくだらなないおもちゃを作って設定したのだろうか、作った奴は。

……ああ、それにしても。弟よ、お前もか。流石に二度目ともなりやあ心構えも出

来てきてる。アイツとも事件以来はすっかり疎遠になっちゃった。最後に見たのはおふくろと一緒に面会に来た時だったか。俺のことを散々あしざまに罵っていたっけな。

そりゃそうか、殺人犯の親族ってだけでずいぶんな色眼鏡で見られただろうしな、きつとそこには。俺の想像もつかんような苦労と悲嘆があったんだろうよ。まあ、それがなかったとしても親族とはいえ殺人犯と仲良しこよし、なんてよっぽど精神がいかれてなきや無理だろう。しかし、今頃どうしてたんだろうな、アイツ。元気でいてくれるといいんだが、まアでもこれでいいか。厄介な兄の事なんてすっぱり忘れちゃってさ。

「容赦ねえな。……おい博士、どこも動かないみたいだぞ。」

「分かりました、二階へ向かってください。」

くだらないことを考えながら、あちこちいじくり倒してみた後に指示を聞いて再び動き出す。次は二階だそうだ。階段、エスカレーター。どっちで上がった物か。まあ、連中がデータ取りに使えるだろう方はエスカレーター、だよな？ いやまあどっちでも変わらないか。

「当然っちゃ当然だけどエスカレーターは動いてないな」

言うまでもない事だが逐一報告しなくちゃいけない。こういうところも難義…というよりは面倒くさいくらいだ、だからってさぼるわけにはいかないのだが。

「一階と同じように大まかに探索してください。」

エスカレーターを上つてすぐのあたりでまた指示が入ってくる。その言葉を聞いてあたりを見回してみるが…冷温の入っていない保管ケースの中にはやはりレプリカの野菜。自分の足音だけが響いてくる静かなこの空間がひたすら不気味に感じられる。

「了解。見たところ…果物野菜コーナーって感じだな。」

インカムをかすかに口元に寄せて自分の見たものそのままを報告してからまたもとの位置へとインカムを離してゆっくりと周囲を見回しながら二階の奥へとその足を踏み入れていく。

そんな時だ、またあのアナウンスが聞こえてくる。…くそ、もう聞きたくない。子供の声に神経がかきむしられるみたいな感じがする。自分という存在がどんどん希薄になっていく。大した事ねえって思ってたつもりだったんだが。慣れは出来て

も身構えちまう。

「お知らせです。■■■■さん、■■■■さんがお待ちでした。」

…なるほど、な。そんな人からも俺の存在を消せるのか、此奴は。とんでもない話だ、いくら憎んでも憎み切れない、恨んでも恨み切れない、ある意味では最も忘れることのできない相手のことだろうに…この名前には聞き覚えがある。俺が殺したあの人の娘さんだ。…クソ、そんな相手の頭ん中からもオレの事を消せんのかよ。忘れた方が好都合だと思ってたのは俺自身の筈なのにいざこうなってみたら…クソ。

「ああ…なんつーか…」

鬱屈した思いが胸の中をぐるぐると駆け巡って気を許してしまえば思わず口を突いて出てくる。こんなところに来るべきじゃあなかった。甘く見ていた。じわじわと弱火であぶられて、紙が端っこから焼け落ちていくみたいに俺が世界から零れ落ちて欠け落ちていくような。自分という存在が人々の中から消えていくんだ。

どっちみち、どうしたってここに向かうのが厭だと言っても拒みきれるようなもんじゃないさ、それをやるにや自殺くらいしか手がないってのもわかる。何度も考

えたことだからよ。

そりゃあ…だが、軽い気持ちでホイホイと首を突っ込むべき場所じゃあない。誰がどう考えたって。イカれてる。こんな場所を保護してぶっ壊さない財団も、この建物も、此処をこんなにした連中も皆、皆……だが、そう思いはしても。到底拒める立場じゃないのも確か。何せ俺は殺人を恩赦で許してもらった身。

そもそもこの財団の性格はそういうものだ。異常なものがあれば自分たちの理念に従って確保し、収容し、保護する。末端の俺ですらその御大層な理念は伝わってきている。

そしてその異常性を調査する…俺達最下層の職員はそのためにある人身御供みたいなもんだ、俺達は。俺達みたいな身の上の奴なんざごまんといる。イカレタ話だ。

…へ、世間一般じゃ俺の方がまず間違いないくイカレ野郎な訳だが。閑話休題。湯立ちそうな頭を無理やりあちこちへ思考を飛ばして必死で落ち着く。そう、これは俺が望んだ道、望んだ結末。だから…

「休憩は認められていますが、調査は速やかをお願いします。」

「おう……調査と言ってもな……多分全部サンプルだろ、これ。」

相変わらずの嫌味になるくらい冷静な声。ともすればアナウンスの方こそが人間味がある様にすら感じてしまう。どうやったら此処までシステムティックな声音が出せるのやら。財団に処理されてるのかもしれない、自我研修とかなんかそういうのだ。知った事じゃないが。もし知ったら消されるのかもな、ハハ。

「お知らせです。■■■■さん、■■■■さんがお待ちでした」

……？ 今度のアナウンスにはさすがに困惑が沸き上がる。その名前に全く聞き覚えがないからだ。誰だ、こいつらは？ 俺の対人記憶力はお世辞にもいいとは言えないが。それでも、他人の名前はそうそう忘れない、ましてや俺の名前を知ってるくらいの相手のことは。

……いやまあ、そうか。さんざんニュースでも報道されたのだから、俺の名前を一方的に見知った連中もいるだろうが。しかし、これまでさんざん関係の深い相手の中から俺を消しておいていきなり見知らぬ他人とは。もしかして記憶を消す相手のネタ切れか？ そうであれば救われるが。

だがそればかりは期待しない方がいいだろう。そう。オレはそう長くも多くもな

い、この人生の中で希望的観測なんてものはクソの役にも立たないってことをさんざんに教え込まれたからだ。いやな予想に限っては以上に当たるって事も、同じくらいには。

「こちらの研究員です。何もなければ三階へと上がってください。」

…成程。

「ああ、だよな。聞き覚えの無い名前だったから驚いたよ。3階ね、了解。」

もう一度、停止したエスカレータを使って指示通りに三回へと上がる。ふと、思いつく。この嫌味なアナウンスはさっきから定期的にひっきりなしに流れる。つまり、全てが止まったこの中で、唯一放送室だけが稼働し続けてる、って事だ。それなのに確か前もって見せられた情報では…

「放送室には入れないんだっけ？」

「はい。」

「そうか…あのアナウンスだけどさ、なんか違和感があるんだ。」

「詳しく聞かせてもらえますか？」

「あーその、ここって人が居ないじゃんか。だからその、アナウンスが鳴るのは異

常だよな。遠隔音声か、そうでもなきや幽霊かって思うんだけど、ハハハ……その割にはアナウンスの度に、本気で呼ばれてるような感じがするんだ……伝わったかな。」

そう、おかしいのだ。まあここで理屈を求める方がおかしいってなもんだが。それでも。稼働してないはずのこのデパート、その中で唯一オレとかかわった人々の名前を呼んで。稼働し続けている放送室。

さっきも思ったけどどうも嫌な声だ、子供が「必死に」どうにかしようとしているような、そんな。システマチックに用意されたものを読み上げるようなもんじゃねえ。人間味を感じさせる、声。

…なんというべきか。この声は必死なんだ。何か訴えかけようとしているかのような。どういう意図があるにせよ、無機質な自動音声なんかじゃあない。何かを、伝えようとしても伝わらない何かを教えようとしているような。どうしてかはわからない、でもオレにはそう伝わってくる。これはきつとこの場にいてじかに聞いてみないと分からないだろう。

それでも、恐怖のあまりオレの気がおかしくなったとかそういう要因を考え

ないとすれば。この声はやっぱりどうにもおかしい。は、そんな感受性豊かな人間じゃないはずなんだが。

必死に、どうしようもない物に対して子供が足掻こうとしてる、そんな風な…、クソ、これ以上は考えたくもない。それ以上思考を進めちまえば何かとんでもなくデカイ罠に、ドツポにはまり込んでしまうような、そんな感覚にとらわれる。

第一、俺の感覚論なんか学者先生方の御大層な研究やら調査やらの前には子供だましにも劣るようなもののはずだ。どのみち、この調査はあそこまで行くんだ、行くしかない。このクソツタレ放送を垂れ流しにしてるクソツタレ放送室まで。であれば。きつと、全ての答えはそこにあるはずなのだから。入れないにしても、きつと。何かしら。

…三階につく。同時にまたあの放送が無慈悲に宣告する。

「お知らせです。■■■■さん、親戚の皆さんがお待ちでした。」

…おっと。これまた一気に行ったもんだ。親戚の皆さん、か。へへ、まあこういう前からさして親しいわけでもなかったんだ。まあこれは大してダメージにはならない。

それでも。やっぱり、何か胸に大穴が開いたような気分にはなっちまう。自分勝手な話だ、本当に。それはともかく。気を紛らわせるように、周囲を確認する。服があちこちに並べられている。マネキンがなんとも不気味に思えてくる。普通のショッピングモールなら気にも留めないってのに。乾ききったのどがひりついて、言葉を絞り出すのに少し時間がかかってしまう。

「……………3階は服売り場だ。レディースが多い。」

「了解です。探索して何かあれば報告してください。」

「分かった。あと、さっき報告した感情は今も感じてる。語りかけられてる気分だ」
博士からの返答にさらに付記しておく。たぶん、こういう報告が喜ぶんだろう。どうせ皆から忘れられるんだ、それならこいつらの役にくらいは立っておくか。我ながらなんて情けない心境の変化なのやら。

「お知らせです。■■■■さん、■■■■さんがお待ちでした。」

「子供の声は苦手だな。女の声ともなるとかなり苦手だ。」

「D・1203との関係を教えてくださいますか？」

「あいつか、仲良かったな……………もしかして、俺と深く関わってる人間だから、優先

的に呼ばれちゃったのかな。」

そのまま三階の服売り場を探索し、歩き回ってるときにまたアナウンスが響き渡る。それと同時に思わず苦り切った感想がつい口をついて出てくる。昔から子供は嫌いなんだ、うるさくて、それに妙に甲高い声が頭にキンキン響いてくるみたいだ。その感想を聞いた途端、間髪入れずに博士のほうから質問が入ってくる。

関係を教えてくださいますか。その質問にアイツと話してたくだらな話がよくがえってくる。同室で：ほかの連中より仲が良かったと思う。そうか、アイツも俺のこと、忘れちゃったんだな。くだらないバカ話で笑ってたもんだが。

そこまで考えてふと、呼ばれる順番に疑問を覚え、博士に聞いてみる。考えてみれば、関係の深い人たちの中から優先して俺の存在が消えてってる、そんな気がしたから。本当に何となくだが、たぶん推測は当たってる。あてずっぽうなのになんとなく確信を覚えている。なんて嫌味な場所だ、此処は。クソ。

「考慮には値すると思います。」

「ん、分かった。」

とりあえず記録には残してくれそうだ。根拠なんて何もない推測だつてのに案外

律儀なもんだ。まあこういうのは実際に体験する者の感想こそが大事なもんなんだろうか？頭のいい博士方の考え方なんてよくわからんが。

考えてもわからんもので悩んでも仕方ないか。…だが、やはりと言うべきか。己の見識を告げてしまえば、そこからは堰を切ったように、探索とは無関係の想いをぶつけたくなる。或いは、唯一オレを忘れないであろう記録媒体に俺という存在が抱いた焦りを、恐怖を。せめて少しでも記憶していてほしかったのかもしれないが。「もう気付いてると思うんだけどさ。」

「何がですか？」

「俺はこの調査に志願した事を後悔してる。「忘れて貰えるなんて最高じゃねえか」なんて軽い気持ちで志願したんだ。「そしてそのまま死ぬるのなら理想だな」とも思った。でもさ……皆が俺を忘れていく、皆が俺を感じられなくなる。怖くてたまらないね。嫌になって来たよ。」

「調査の中断は出来ません。私達があなたを知覚不能になった時に備え、あなたと面識の無い警備員がデパートの入り口に待機しています。」

「いやいや、脱出しようなんて思ってたええよ。ただ、これは本当に地獄だ。どんな

性悪野郎がこんなシステムを思いつくんだか。」

「お知らせです。■■■■さん、■■■■7さんお待ちでした。」

「財団の人間です。」

「分かった。3階はあらかじめ映像に収めた。4階に向かって良いか？」

「お願いします。」

そこでまた会話が途切れる。当然だ、彼等にとつては俺はモルモット。別に話をしなくても実験に用いる事が出来ればそれでいいのだ。まあ、その点を加味するなら割と会話に付き合ってくれるこの博士はまあまあイイヤツなのかもしれないが。実際：一度ヤバイブツの収容されてる棟の清掃を命じられた時に離れた博士は何というか俺達をモノを見るような目で見ていたっけな。そうそう、それでその博士の悪口で盛り上がったもんだ。：けど、アイツの記憶からはもうそんな思いでもきれいさっぱり、なかったことになってんだろいうな。

そう、俺はもう少しで誰でもない誰かになっちまう。文字通りのジョン・ドウに。ただ、最初のころに感じていた恐怖感には既に消え去っていた。今は只みぞおちにずっしりと重たい物がのしかかってくるような、疲労感と虚無感ばかりを感じて、

只管に調査を続行している。止められない、というのも有るし。

：調査を、誰かから言われたタスクをこなしていないと、自分すらが自身を忘却してしまふんじゃないか、そんな幻想に囚われて。否、それは幻想ですらないのかもしれない。本当に有り得る事なのかも。

つまり、この調査が己の終着点、ことのどん詰まりには、きっと。まったくもってバカな考えだと、否定できないのが俺の見てきたうえでの経験だ。ありえないことが、あり得る。常識なんてものはまったくもって役に立たない、どこか有害ですらあるのだ。

だから奥へ行く。どのみち後戻りはできないのだし、この道を歩むことに決めたのは自分自身。こうなりたいと思っていたのは己なのだ。然し、この静かで人気がないデパートの中で唯一人間味を感じさせるのがこのアナウンス。理由は知らないが、変声前の女の子の声で繰り返し流されてくるアナウンスのみだ。

それが、おかしい。こういう場所では大抵機械的な、不気味なくらい人間味がなような奴が流れてくるのが大抵だ、でもこれは…生の感情を想起させる。何度考えてもやはり。それも悪意じゃない。焦ってるような、悲しんでるような。何に対

してかはわからないが漠然とそんな気がするような。形容しがたい感覚を覚える。俺の存在を消そうとしてる側に存在しているはずのアナウンス、なのになぜ。

嗚呼全く。誰からも忘れられていくせいで唯一俺の存在を覚え続けてるこいつの存在に親近感を覚えちゃってることか？笑えねえ。

「なあ、アナウンスが速くなってないか？」

「いえ、ラップタイムは正常ですが。何か感じましたか？」

「いや……少し前から感じてたことだ。なんだろう、アナウンスが焦ってんのかな……言葉にし辛い。アナウンスを読み上げる速度はどうだ？速くなってないか？」

「……それは記録対象外でしたね。可能性はあるかも知れませんが、音声記録を持ち帰ってくれない事には分析出来ません。」

「了解、最後まで調査するよ。今更乗り掛かった舟から降りることもできないんだしな。」

やっぱり、アナウンスの様子がおかしい。現用や幻覚なんかじゃねえ。生の間人間のなんていうか、焦りってやつを感じる。そう思って疑問を口に出す。正確な変化なんざ俺からじゃ気づけねえだろう。調査の手助けってもんだ。

「お知らせです。■■■■さん、■■■■さんがお待ちでした。」

「四階は本屋とか文房具とかが売られてるな。んで、今のアナウンスは？」

どうにも。また聞き覚えのない名前がアナウンスから流れてくる。それにしても博士の返答がずいぶん遅い。これまでには必ず即座に応答してきていたのだが。こちらの報告に対して無言の時間が数分は続く。

トラブルかなんかか？まさか。財団の連中が実験に対して些細なトラブルを起こすとは……嗚呼、いや。そうでもないか。聞いた話じゃ。結構やらかしてるらしいしな。……ああ、いや。そりや違うか。さっきまで俺を認識していたはずの博士の声が途切れる。つまりはまあ……

「博士？　おい博士ー？　……ああ、なるほど。今のアナウンスでもうお別れか。まあ、どうせ代わりが居るだろ？　……探索を続けるぞ？」

確定だ。返事もない。また一人サヨウナラってわけだ。

「お知らせです。■■■■さん、同級生の皆さんがお待ちでした。」

「焦ってんのか？　そんな一気にやること無いだろ……？　……考えたんだが、お前やっぱり……」

これまでとは異なる、呼び方。くくれるくくりで強引に一まとめにして名前を呼び出す、荒っぽいやり口。これまでは個人だけを対象にしていたせいかなまだ迷子のアナウンスのような。ぎりぎりの現実感のようなものがあつた。

非常の中の最後の本のひとかけらつてとこだが。だが…こうして聞くと改めて思う。こいつは…この声の主は何かを焦っている。何かを心配している。理性的な思考からじゃない。直観だ…あくまで。

「すみません、博士と交代しました。」

「え、ああ。よろしく。」

インカムからは聞きなれない声が響く…最も前任者にしたところで数十分程度の付き合いだつたわけだが。しかし…時間の流れを妙に感じる。同級生。…小学校から大学までの全部か。ああ、あの頃は楽しかった。ガキの頃は昔を振り返ってばかりの大人にはならないようにしよう、なんざとがってたことも考えてたっけかな。

はは、今の俺をあの頃の奴らに見せたらどうなるんだろうな。まあ蔑んだ目で見られるのが落ちか。さっきまでの「相棒」より少しだけ甲高い声に思わずすつとぼけた声と内容で返事をしてしまう。我ながらなんともし…

「交代の最中に何かおかしい点はありませんか？」

「アナウンスが一件来たよ。俺の同級生は俺のことをすっかり忘れちゃったみたいだ。思い出がありありと浮かぶな。こんな時に限って。楽しかった思い出がゴロゴロと……」

「把握しました。」

聞きなれないくせにこれからしばらくは付き合う羽目になるであろう声のせいでもうにも。思わず気持ちが緩む。聞かれてもない、言う必要もない。奴らが求めてもないであろう心情をボロボロと吐き出してしまふ、無論それを最後まで彼らが聞き届けるわけもない。

戯言を記憶させるだけ記録媒体の容量の無駄だといわんばかりに。

「……さっきの博士は俺の言った記憶を全部失ってるんだよな？　じゃあ俺が報告した事は全部報告し直した方が良いか？」

「いえ、音声は記録中ですので大丈夫です。」

会話を強制的に打ち切って続行させようとする相変わらぬ態度に半ば呆れかえりながらふと思ったことを問いかける。

全く。此処までしといて全部忘れたから最初から、なんて冗談じゃないってものだ。…ま、考えてみりゃ間抜けな質問だったよな、こいつらが情報の記録を怠るわけもなし。

けどまあ改めてこいつにも俺の所感を伝えておくとしよう。記録を通してじゃない。俺の生の声を。忘れるまでのひと時の間。経過を語る必要くらいはどのみちあるだろうしな。

「そうか。ざっくり言うと、俺はあのアナウンスが人間味に溢れてるように聞こえる。他は…：そうだな、アナウンスが早くなってるように感じてる。子供の高い声だからそう聞こえるだけかもしれない。」

「分かりました、4階の探索を行ってください。」

先を促すような研究員の声。カメラ越しに一つうなずいてあたりを見回し、探索を再開する。でかい書店が丸まる一つのフロアに配置されたつくり。傍らに文房具店が併設されてるような、よくある構造だ。

「お知らせです。■■■■さん、被害者一族の皆さんがお待ちでした。」

「…ああ、クソ。恨んでくれてたっていないから俺を忘れないでくれ……」

またアナウンスが聞こえてくる。被害者一族。重い存在だ。泣きながら俺をなじるばあさん。その肩を無言で抱きながらこちらをにらみつける爺さん。無関心な様子ながら義務だからと言わんばかりに法廷に出席する近しい親族。

或いは。或いは：何も言わず。何も語らず。それでいてひどく意志を込めた視線を向けてきた。あの瞳を忘れることはできないだろう。冷たく、それでいて荒れ狂うような。：何があっても決してお前を許さないというような。は：心底ブルちまった。

ってのにな。そいつらの記憶から俺はもう存在しちゃあいない。ありえねえだろ。今更だが。そんだけ強く情動をかき乱して。記憶に刻み付けられたはずの相手すらこの中じやかき消されちまう。蜃気楼みたいに、あったはずのそれがふいっと消えちまう。上書きなんかじゃねえ。

何だってんだ本当に。足を止めていたことに気付いて再びのろのろと周囲を探索しだす。試しに近く似合った書籍を手にとってタイトルに目を通してみる。よく見知った名前。もっとも内容に目なんか通したこともねえが。ざっとほかの本にも目を通す。廃業当時にそこに並んでいただろう品ぞろえ。誰からも忘れられたであろ

う其の当時の光景。今の俺の姿を代弁しているかのような。誰からも忘れ去られた。本来このデパートがそうあるべき姿。俺のこれからの姿。それを間近で見せつけられているような感覚。

「書籍とかは全部見て回る必要あるか？」

「概ね映像に収まっていれば結構です。」

「分かった。」

また思考が迷路に陥りかける。それも出口のない迷路に。それを振り払うように監視しているのであろう研究員に声をかけて調査を切り上げる。目の前に併設された文房具店のほうにも足を向けて様子を見に向かう。高級なものとはさほどないが日常の使用には便利。その程度の文房具がそれなりの数で陳列されている。

「お知らせです。■■■■さん、警察の皆さんがお待ちでした。」

「おい、お前はこういう優先度でそれをやってんだ？」

思わず悪態が口について出る。悪態というよりは、疑問に近しい問いかけが。誰が答えを返すわけでもない。それは承知しているはずなのに。アナウンスが名前を告げてくる言葉の羅列。法則性がある気がしてならない。明確にそう、と思えるわ

けではないのに。

「D・1104、誰かと話していますか？」

「アナウンスとだよ。無意味だろうけどさ。」

「そうですか。先程「人間味」というワードを報告していましたが、現在はどうですか？」

「現在も変わらずだ。」

「分かりました。概ね探索が完了したら報告してください。」

短く問いかけに応じてやる。そう、変わらない。内容が変わったわけでも、読み上げるペースが変わっているわけでもない。其れなのに焦燥だけは確かに伝わってくる。インカム越しに聞こえてくるこいつらの声よりもはるかに人間味に富んだ声。

何度聞いてもそう思う。思わずまた毒を吐きそうになる。けれどそんな反論すら。無意味。或いは無駄だと切り捨ててくるのだろう。相変わらず。CCDカメラに文房具店の様子を映し出していく。先ほど認識した通り。

「お知らせです。■■■■さん、同僚の皆さんがお待ちでした。」

「……このアナウンスに話しかけるのは無しか？」

「可能な限り不要な発言は控えてください。それでは5階に向かってください。」
「分かったよ。」

また一気に俺を見知った奴がこの世から消えていく。いや、俺という存在がこの世から消えていくって表現のほうが正しいのだろうか。まあどのみち些細な違いではあるだろうが。なあ、お前はこういう気持ちでこいつを放送してやがるんだ。楽しむような声ならわかる。無機質な声でも。

だってのに。なんでお前はそう甲高いオンナノコの声で辛そうに、焦ってるように語りかけてきやがる。不似合い過ぎんだろ。わざわざこんな大掛かりなクソの塊をおったてといて、こっちの実を心配するような声でのアナウンス。でもその内容が告げるのは死刑宣告にも似た内容、いやある意味では死刑宣告そのものだ。

死ぬのとだれからも認知されないのは、どっちのほうが悲劇なんだろうな。アナウンスと同じくらい相も変わらず電源が落ちたまま稼働してないエスカレーターを登って5階へ着く。これまでの売り場とは違った雰囲気。バックヤードのような、というべきなのだろうか。設備機器をまとめて同じフロアに放り込んでい

るような。何とも言えない雰囲気。

怪物のはらわたを見せつけられているような気分。もちろんすべてが錯覚だけだ。さっきまでの無機質な売り場とは異なる意味で不安を否が応でも掻き立てさせてくる。それから上に上がる階段もエスカレーターももう存在しない。誰にもわからなくなるまで俺はここに残ることになる。文字通りのどん詰まり。インカムに手をやって通信をつなげる。

「ボイラー室と、空調室みたいなのと、ちょっと新しめの扉があるな。」

「その新しい扉が放送室です。扉の上に「放送室」とプレートが掛かっているはずですよ。」

そうやって情報を伝えてくる研究員の声をほとんど聞き流しながら扉の前に立つ。文字通りの全ての元凶。理屈も理由もなしに人一人を完全に世界から消し去る装置。此処まで来てしまえばさっきまでの恐怖心はどこにもない。存外普通のつくりなんだな、ってな程度のしょうもない感想しか出てこねえ。分厚い鉄製の扉の真ん中には何かの文言が書かれてある。思わず顔を近づけて声に出す。疑問を。

「なんか、書いてあるぞ？」

「読み上げてくれますか？」

「ああ、赤いマークで「迷子通知システム（自動） 停電中でも動くようにハードウェアを人高性能にしました。」如月工務店」って書かれてる。」

「記録しました、ありがとうございます。」

：……どういふこったよ。わざわざこんなもんを作ってそれで善意みてえにのたまうやつがいるってのか。そりゃまあ、突然ポツと出でこんな意味の分からん現象引き起こす装置が発生する、つてのも理解できねえが。こんなたいそうな能力持ったでかい仕掛けを作っというて工務店だと。

まるで……まるでなんでもない仕事みてえにやりやがる。どうなってるんだ。一人一人の人生変えちまうかもしれないねえ、それも最悪の形によ。だってのに、こいつは……まるで、クソ。普通の工事みたいに、機器を導入してるみたいにこんな真似しでかしたってのか。むかついて取っ手を掴んで乱雑に引っ張ってみる。案の定というべきか。ノブは周りすらしない。

「まあ、無理だな。」

「分かりました……内部調査は以上です。以降は対象Bに該当する人物が居なく

なった場合のアナウンスを記録する事が目的となりますので、その場で待機してください。今後は基本的に指示を行いませんし、もし私達があなたを知覚不能になっても代理は立てません。脱走は無駄なものと考えてください。十分なデータが取れたと判断出来たら帰還してください。」

「分かった。んじゃあな。」

冷たいタイルでできた床に座り込んで目を閉じる。此処で終わり。そう思ってしまふとこの短い探索劇の間にうかんでいたかんがえのすべてがばかしくてどうでもいいものにも思えてくる。

実際そうなんだろう。何せ俺はもうすぐあらゆる人間の前から存在しなくなる。今更そのことを嘆いたところでその事実と終着点に何ら修正はないのだから。

「お知らせです。■■■■さん、勤務先の皆さんがお待ちでした。」

ザ、ザ。

ノイズが通信越しに一瞬は知った後でぶつりと途切れる。成程ね、俺はもう誰からも認識されなくなった。つまり連中。通信相手も実験してたのかどうかも分からなくなっちゃったってことか。この忌々しい爆弾首輪さえなけりゃ逃げ出せたのか

もな。いまさらそんな気にもなれねえけどよ。

「……これでもう誰も俺を見ていないのか。でも、お前はずっと俺を見ているんだろ？」

は。こうなつてしまえば俺を認識できる相手つてのはこの放送室越しのアナウンスの主だけつてわけだ。こんな皮肉も想定して作つてたのかね？ 全く何から何まで人がわりィ。

「本日はご来店頂き誠にありがとうございます。」

「そりやどうも。」

しばらくしてから口を開く。随分長い時間だったし数秒くらいかも。嗚呼、でも。多分実際には二分つてとこなんだろうな。時計も持っていないせいでよくわかんねえが。後ほんの少力で世界中のだれもが俺の事を記憶しなくなる。いや、記憶していた全て事消し去られる、つてほうが正しいか。毒づいてやりたくもなるっつてんだ。どうせもうしゃべりかけようとしてもいちいち聞いてくるような監視の目もねえんだし。

「なあ、部屋の中に誰か居るか？ 子供がアナウンスをするなんて普通じゃない

ぞ、それにハードウェアは……」

出てくる言葉は月並みな疑問。問いかけたってどうせ返事なんて返ってこねえってのにな。ここにきてからこっち、後悔してばかりだ。ここに來たことを、実験に志願してきたことを。…いいや。それ以前に俺のしでかしてきたこと、其のものを。もう少しでそいつは全部世界から消える。消されちまう。

贖罪だの。清算だの。そんなこぎれいな言葉は似合わないこと甚だしいけどよ。俺は…全部消え失せてご破算になっちまうのが、させちまうのが無性に。腹立たしくなってきた。当然こいつは俺の身勝手で、独善だ。それくらいはわかってる。……妙なノイズがスピーカー？扉越し？クソ、どこから聞こえてくるかわかんねえが響いてくる。

「今のは返事か？」

…これまでの機械的な、それでいてどこか人間臭い妙なアナウンスだけだった反応が初めて揺らぐ。まるで…まるで、やはり。アナウンスの主には感情があるかのように。

『お知らせです。』



「さん、友達の皆さんがお待ちでした。」

「……いよいよ俺は生きてる意味が無くなってきたな、ええ？　なあ、誰か居るのか？」

だってのに、こんな時でもアナウンスは律義に続きやがる。意思疎通ができるの
が出来ないのやら。其れすらわからねえまんまいつものリズムとペースで読み上げ
る。同じ内容で淡々と。俺を誰かの中から消していく。だからこそ。はじめて垣間
見たその変化の内容を知りたくて扉越しに問いかけてみる。…またノイズが走る。
やっぱりなにかことばをかえそうとしてるみてェに。なあ、よく聞こえない。

「しっかり話してくれ。」

頼むよ。

「ずっと、一人。」

立ち上がって放送室の扉の前に立つ。放送室の中の奴にも聞こえるように。何と
なく、思う。この声の主は多分、このクソ装置のシステムとかじゃなくてきつと…
そう、きつと被害者。だから。

「なんだ、ちゃんと返事出来るじゃんか。ずっと一人……か、俺ももうすぐそうなるぞ。」

「……なんで？」

「なんでってそりゃ……このアナウンスのせいだ。」

「お知らせです。■■■■さん、知り合いの皆さんがお待ちでした。」

「ほらな。」

機械的だったノイズが明確な意味の。意志のある言葉を放ち始める。なんだ、やっぱりそうなんじゃねえか。このデパートに入ってからこっち聞き続けたアナウンスの音声。

それと同じ……いや、あれよりもっと人間らしい声がそうやって俺に語り掛けてくる。孤独の恐怖に耐えかねて俺がおかしくなったってんじゃないやねえ。現実聞こえてくる声。ドっから響いてくるかはわかんねえが。

「なんで逃げないの？ 私と同じになっちゃうのに……」

「……お前と同じ？ お前は誰なんだ？ 早くここを開けてくれ、直接話したい。」

放送室の扉に手をあてがいながら声をかける。あって何かできるとは思えねえ。何をしてやろうかも俺自身はつきりしてねえってのに。それでも、そう。焦燥感、のような。何かしないと、って意識が。俺にそうさせる。

「私はこのデパートの、最後の迷子だった。」

「……続けてくれ。」

「皆が私を忘れたの……お母さんもお父さんも、皆。そして私は出られなくなつたの。」

「……そして、俺もそうならうとしてるのか。」

なんとなくわかつちやいた。考えてちやいた。こいつは…扉越しに話してるこいつ、この子、は。俺の行き着く姿。俺の先達。誰からも忘れ去られた、ご同輩。…最も俺と違ってその結末を望んでたわけじゃねえんだ。

よほど悲劇の主役にやふさわしい。迷惑千万だろうが。意識しない間に世界中から忘れられるってなどんな気持ちなんだろうな。俺と違って覚悟を決める時間もない。俺と違って捨て鉢になる程、絶望してたわけでもない、完全な偶発事故。

「だから早く逃げて。ここはつらいの、ずっと出られない。」

「ああ、本当に辛いな、良く分かるよ。でも俺は自由に逃げ回れる身じゃないんだ。」

そんな状況にいるってのに。自分の事を嘆くより同じ境遇に陥りそんな俺のことを心配してやがる。何ともまあ。泣かせる話だ。外にいる頃はそんな真似は偽善だろうかと。タカをくくってたんだろうがよ。

けれど、そう。俺はどのみち逃げられない。…逃げる気にもなれない。逃げたらいけないから。そんな気すらしているのだから。全く。こんな状況になって初めて、俺は自分と向き合おうとしてるってのか？ 笑えねえ。誰からも。全部から忘れられて消え去って。やっと勇気が出たってのか？ 最初からそうしてりゃ、きつと…。

「逃げて、逃げて。ここが開いたらもう手遅れになっちゃう。」

そう、きつと手遅れになっちゃう。でも、でもなお嬢ちゃん。そういうことじゃねえんだ。きつとお前さんにやわからねえ。其れによ、もうどっちみち手遅れなんだ。でも、だからって何も出来ねえわけじゃねえ。…だから、なあ。

「もう十分手遅れだ。それに放送室に二人はちょっと狭いだろうし、アナウンス役

は一人で十分だ。そう思わないか？　そしてアナウンスをやるのは普通は大人だ、子供に任せる仕事じゃない。」

「……なにをするの？」

「俺は犯罪者だから償いをしなくちゃダメなんだ。でも皆は俺を忘れちゃっただろうから、代わりにお前に償う事にする。」

決まってる。そうだよな、何をするかなんて。やったことに対しての帳尻合わせはどっかでやらなくちゃならねえんだ。でも俺はその機会を逃し続けた。逃げ続けた。だから、な。身勝手はどうしようもない結末だよ。

…それでも、そうさ。迷子のアナウンスをするのは子供の仕事じゃねえ。子供は放送される側であって。放送する側に回るべきじゃねえんだ、だから。正しいように戻さねえと、な。これが、俺の、俺なりの結論。だから…

\$\$\$記録映像より\$\$\$

「2, 3 秒間の激しいノイズ　映像が途絶する」

「お知らせです。 ■■■さん、皆さんがお待ちでした。」

〔鍵の解除音〕

博士。博士、扉……開いたぞ。

〔2、3秒間の激しいノイズ 映像が途絶する〕

これが最後。俺はこうなる、でもこれでいい。だからよ。せいぜい笑って。消えるでしょうか。

「よう、お嬢ちゃん。」

…それと。あばよ。

〔7分の間激しいノイズ〕

〔映像が復旧 4階を映している〕

〔映像は3階を映している〕

〔映像は2階を映している〕

追記：待機していた警備員がSCP-544-JPから若い女性が出て来たのを発見し、保護。この女性はSCP-544-JP-Aと分類されました。SCP-544-JP-AはD-1104に携帯させたカメラ、マイクを所持していました。この調査以降、「少女の声」と形容されていたアナウンスがD-1104の声質に変化しました。D-1104はいまだ発見されていません。

…随分騒がしい。またここに誰か来たってのか？財団の連中も懲りねえもんだ。今更こいつに研究価値なんてないだろうに。調べつくしたろうに、またぞろ。ひでエ目に誰かを合わせたいってのか。やれやれ。言いたかねえが俺はこうなった、

だから言わなくちゃいけねえ。時間がたてば。だからどうか、その前に出て行ってくれよ。俺みたいになる前に。あの子みたいになる前に。…ま、無理だよな、顔も見えねえご同輩。アンタも財団にそうさせられてるのか。ご愁傷様。

「…覚えていますか？」

…震える女の声が言葉を投げかけてくる。まさか声をかけられるなんざ思いもしなかった。どっかで聞いたような、聞いたこともないようなそんな声。そもそも…そう、そもそも。俺を覚えてるやつなんざもうどこにもいねえのにな。妙な話だ。「ずっと長い間、私はここで迷子になっていて…貴方に助けて貰いました」

ああ、おい、おい。嘘だろ。そんな訳がねえ。

「私、それから元気に生きてきました！友達も、恋人もできました！旅行にも行って、大学も卒業して、私、財団の職員になりました！」

嗚呼、まったく。そうか、そうなのか。財団に入ったことだけはいただけねえが。そうか、お前さんはお前さん自身の人生を、取り戻せたんだな。独りぼっちじゃなくなっただんな。

「30秒だ」

知らない誰かの声がする。きつとあの子のAAAAAA嬢ちゃんの
連れなんだろう。

「私は貴方を覚えています！ 貴方を覚えたまま、生きていくから！ 貴方のおかげ
で、私は、私は」

「もうすぐ1分だ。急げ」

へ。俺の事なんざ忘れちまえばいいのによ。他のみんなみたいに。俺は…俺は、
そうか。少なくとも一つくらいはいいことができたんだな。嗚呼、よかったよ。本
当に。

「私は、楽しく生きてこれました！ ありがとう、ごめんなさい、私は貴方の優し
さに甘えます！ 貴方を覚えて、生きていきます！」

嬢ちゃんの叫びががらんとしたデパートに反響した。だってのに俺は何か。何か
返してやれないのか。誰からも忘れられたからってよ。何か一つくらいは返しても
いいよな。

嗚呼、クソ。よし、いけそうだ。へ、へ。しばらく放送なんざしてねえしする気

も起きなかったがよ。こいつだけは別だ。…さあ。こいつが俺の最後の放送であつてくれればそれでいい。

「後1分。きっかりで出るからな」

「大丈夫です、解ってます。自己満足でも良いんです。私がやりたかっただけ…」
クソったれな放送機材に電源が入る。畜生、ふざける。俺は誰かを誰かの記憶から消し去りたいわけじゃねえ。このクソったれ放送で、誰か一人でも。何か一つでも。どっかの誰かに、気持ちを届けて。そいつを覚えておいてもらうなんてことがあってもいいじゃねえか、なあ。もう迷子はどこにもいない。だから。

—— 本当に。嗚呼、本当に。

「…久しぶりだな、お嬢ちゃん。」

SCP 小噺集

著者 後方注意鯨

発行日 2023 年 1 月 11 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/117506/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
